

愛國の眞理 全

特21
193

佛國リギヨル口述
日本前田長太筆記



愛國の眞理 全

一名

關安正議

緒言

苟も日本帝國の歴史を讀みたる者は、就中前年の征清事件に於ける日本國民の行爲運動を目撃したる者は、本書の表題を見て必ずや奇怪の思念を起さん、何ぞや、日本古來よりの歴史は、殆んど一頁毎に祖先の赫々たる功業を記し、隆々たる偉勳を載せて、事毎に後昆をして忠君愛國の志を起さしめ居るにも係らず、且や今回同國四千萬の同胞が、均しく愛國の衷情に感發して、榮譽ある凱旋を尨大の清國に占め、東洋に此國あるを全世界の耳目に示し、所謂「大なる日本」を地球上に建設せんが爲には、一身を鴻毛より輕

二
んじ、萬事を犠牲に供して、鞠躬盡瘁したるにも拘らず、故
さら茲に「愛國の眞理」と表題を掲げて、同國の人士に語
らんとするが如きは、洵に無用の贅言にして、大和國民を
愚にするも亦太甚と思考せらるればなり、蓋し日本の人士
は愛國衷情の何物たるが如き、疾くより之を知悉せり、豈
皆知悉せるのみならんや、實際の功業を以て古來幾回か之
を表白し、今尙ほ大に之を全世界に表白しつゝありて、宛
も愛國の好模範を世界萬民に示し居る者の如く然り、余
豈に諛言を呈する者ならんや、是れ誠に實際の景狀なり、
然りと雖も余の今斯く感驚する大功偉勳は、就中前年の

全國一致より出でたる撼天動地の大活劇は、余をして其由
て來る原因に遡らしめて、深く省察論究せしめずんばあら
ず、斯の如き掀雲翻宇の大事業、豈偶然ならんや、凡そ物、結
果あれば、必ず原因あり、斯る大なる結果には、必ず亦大なる
原因なくんばあるべからず、何となれば一國人民の行爲
運動も、亦是れ一個人の行動に異なるなし、其善たるも惡
たる所に係らず、必しも獨り其支體の物質的結果に歸すべ
からず、其中心の熱情より湧起する事言を待たざればな
り、然らば則ち前年の大事業の如き、固より幾多の原因あ
りて出でたるものならんと雖も、要するに愛國と云ふ至誠

の赤心より發源したる事は、争ふべからざる事實にして、天下公衆の一見して直に承認する所ならん。

事既に此の如しとせば、天下具眼の士にして、眞個に日本帝國の爲を計らんを欲する者は、須らく同國將來の大策に着想一番し、此忠勇義烈なる四千萬同胞の愛國心を永く涵養して、愈々益々高崇雄大ならしむる方道を講ぜざる可からざるや明なり、何となれば國民の愛國心あるは、常に其國の光榮なる而已ならず、亦實に其國の生命にして、生存上必須の一要素なればなり。

是に於て乎余は先づ、基督教は愛國の精神に背戻す、故に日本帝國の將來に取りて危険なる宗教なりと思ふ一部人士の杞憂を散ずるの必要を感じぬ、苟も具眼有識の士にして、正意誠心を以て余の所論を見るあらば、斯の如き杞憂の理非如何は自ら發見するならん、又縱令凡ての點に於て余の意見を賛せざるも、余の所論が日本帝國を愛する一片の衷情より發したるを承認せざるを得ざらんこと、然り、余無似と雖も、此忠勇義烈なる國民の愛國心を一層純粹ならしめ、一層鞏固ならしめ、而して又一層高尚ならしむるに適せざるとは、片言隻句だも吐かざりしを斷言する者なり。

明治廿九年五月師父リギョール氏の意を承けて

前田長太謹識

目次

(一) 總ての宗教皆善乎……………一頁

(二) 基督公教は世界萬國に適合する乎……………六頁

(三) 基督公教と倫理の基礎……………十二頁

(四) 基督公教と愛國心……………十七頁

(五) 基督公教と折衷主義……………三十八頁

(六) 宗教と教育の關係……………五十頁

(七) 宗教以外の倫理學……………六十四頁

(八) 基督公教と近代の學問……………八十八頁

愛國の眞理

佛國 リギョール 口述
日本 前田長太筆記

總ての宗教皆善乎

如何なる宗教も皆善なり、故に各自其好む所の宗教を信奉して可なりとは、唯だ是れ天下凡俗の言ふ所なりと思惟せるに、豈圖らん今や堂々たる學者と稱せらるゝ者も之を口にするに至りぬ、されば今此事に對して論辯するは、必しも無用にはわらざるべきか。

今此事の眞偽を一目の下に瞭然たらしめんと欲せば、宗教を主觀的と客觀的に區別して論ずるに若くはなし。

先づ主觀的、即ち人心の内部より觀察するに、宗教なるものは、或者を信仰し、或者

を畏敬し、或者を希望する心を指すものにして、併せて此信仰、畏敬、希望に準じて、其行爲を左右することを謂ふなり、此點より考察して論ずるときは、總ての宗教皆善なりと謂ふも強ち不可なるべし、何となれば或者を信仰、畏敬、希望するの心、及び此心によりて行ふ事は、決して悪なりと謂ふを得ざればなり、然れども假令宗教を斯く觀察するも、總ての宗教皆同一の程度に善なりとは謂ふを得ざるべし、何となれば其信仰、畏敬、希望せしむる効力に於て、大小強弱の別ある事は言を待たざればなり、其効力の大且つ強なるものは、無論其効力の小且つ弱なるものより善なるべきは明かなり、然れども効力の小弱なる宗教と雖、之を無宗教に比せば、其優劣固より同日の論にあらざるなり、苟も有るは無きに優るとせば、斯の如き事言はずして知るべきなり。

次に客觀的に考察を下さんに、宗教なるものは、人心の中にのみ存するものにはあらずして、人心以外にも絶體的に存立するものなり、即ち、吾人に何々を信仰せよ、畏敬せよ、希望せよ、實行せよと指示教命するものは是なり、吾人單に宗教と云ふときは、

此を是れ謂ふなり、此點より觀察するときは、總ての宗教皆善なりとは決して謂ふ能はず、蓋し斯く絶體的に存立する宗教は、人の信不信によりて變更するものにあらざればあり、(其効力の如きも亦然り)、真ならんか、永遠真なり、偽ならんか、永遠偽なり、人の正直に信奉すると否やとによりて、或は善となり或は悪となるが如きものはあらざるなり、論じて茲に到れば、總ての宗教皆善なりと云ふが如きは、畢竟是れ凡俗の愚言にあらずんば、學者の曲論のみ。

人或は如何なる宗教を信奉するも、皆善き結果ありと云ふものあれども、其所謂善き結果にも、信奉する宗教の如何によりて、大に差異あるを知らざるべからず、若し其信奉する宗教にして真ならんか、吾人に教ゆるに人間は何れより生出したる者なるや、何れに歸着すべき者なるや、又此世に在りて何を爲すべき者なるやを以てし、吾人をして優に聖人の域に達せしむるを計るが故に、其効益や實に偉大なりと謂ふ可し、若し然らずして偽ならんか、人間の本来を示し、人の人たる道を盡さしむるに於て、果して如何なる効益あるかを知らざるなり、此を思ひ彼を想はゞ、己が在來信仰し來れる

宗教に安心満足して、他より來れる宗教を講究信奉するの必要なしと云ふが如きは、自己の安心立命を放棄して顧みざる徒の言と謂はざる可からず、若し果して自家の信仰し來れる宗教にして眞ならば可ならん、然らずして偽なりとせば如何、何を以て己の本末を知るを得んや、又何を以て人道を竭すを得んや、然らば則ち、己の信仰し來れる宗教のみに安んぜずして、東西各種の諸宗教を講じ、其尤も眞なるものを選んで之に歸依するは、人生の一大急務なりと謂はざるべからず、何となれば人命の存亡は、一に其信奉する宗教の眞偽如何に存すればなり。

然らば則ち、眞誠の宗教なるものは究極如何なるべきや、余は簡言以て之を云はん、曰く歴史によりては天授の教なりと確定せられ、道理によりては不合理の點一も之れなく、而して其結果は個人に取りても、國家に取りても、又天下に取りても絶大無比なる者、即ち是れ眞誠なる宗教なりと、斯の如き宗教果して在るや、曰く在り、何と稱せらるゝや、曰く基督公教と稱せらる、今人の稱して天主教と云ふもの即是なり、請ふ之を歴史に徴し、道理に訴へ、又實際に照らして講究の勞を取れ、(余の今茲に之を

論せざるは、啻に言題外に涉るの恐あるが爲のみにあらず、世人をして自ら之が講究の勞を取らしめんが爲なり)、吾人は堅く信ず、此宗教のみ眞にして且善なりと。

人或は基督教信者よりも他教の信者の中に善良なる者之あるを擧げて、我基督教の眞善を打消さんと欲するものあれども、是は故さら基督教信者中の悪人を擧げて、他教信者の善人に比するものなれば、固より公平の議論とは謂ふを得ず、斯く言はば、基督教信者の中にも悪人あり、他教信者の中にも善人あり、故に基督公教のみ眞善にあらず、他の宗教も亦眞善なりと云ふ者あらんかなれども、是れ誤なり、基督教信者の中に悪人あるは、其教理を知るのみにて、之を行はざるが爲なり、乃ち是れ基督教信者とも云ふ能はざる有名無實の信者なり、他の宗教は假令偽教なりと雖、多少其中に眞理を含有せざるものはあらじ、今其眞理の部分を能く守る者あらば、それ丈善人なりと云はざるべからず、基督教の教理を知つて守らざる有名無實の信者に優るや明かなり、然れども此は公平を失したる議論なり、若し其基督教の眞誠なる信者と、他教の正直なる信者とを兩々相比較して公平に論せんか、彼の此に優る萬々なるを見ん、

然れども余は斯の如き議論は人を以て教を計ることなるを以て、敢て深く論ずるに及ばずと思考す、人の善悪は人の善悪なり、教の善悪にはあらずるなり、然らば則ち設ひ基督教信者よりも他の宗教信者の中に善良なる者ありとするも、是を以て我基督教の眞善を打消すには足らざるなり。

(二) 基督教は世界萬國に適合するや

此の如き問題を擧げて之を論せば、人或は奇怪の感を起すものあらん、何とあれば言語風俗の異なり、人種氣象の殊なる地球上の人民が、均しく同一なる宗教を信奉するを得と云ふ事は、一見出来得べからざるが如くに思はるればなり、然れども深く其理の在る所を熟考せよ、此事決して出来得べからざる事にはあらずるなり、其故は何ぞや、眞と善とは東西一貫、萬國共通、國により處によりて決して變更するものにあらずればなり、東の國に眞且善ならば、西の國にも眞且善なると、猶ほ東洋の大陽が西洋の大陽と異なるなきが如し、然らば則ち、前條に論じたる眞善なる我基督教、曷んど世界各國に適合せざるの理あらんや。

論者或は云はん、眞善は國の東西によりて變らずと雖、國の文野によりて往々變る所あるを見る、試に看よ、文明國民の視て以て悪事となす所、野蠻國民は之を悪事と思はず、寧ろ善事の如く見做すとあるにあらずやと、答て曰ふ、是れ單に一善一惡に就て論する時のみ、善惡の大體に至りては、野蠻國民と雖、文明國民の如く之を識別するの明に乏しからず、況んや斯く一善一惡を顛倒するが如きは、偶々此民の誤認に出づるものにして、此誤認こそは正しく眞善なる我基督教によりて矯正すべきものなるをや、然らば則ち、斯る善惡識別の不同は、毫も我基督教の東西各國に適合せざる理由となすに足らざるなり、國の文野によりて其理想に高下の差別あるが如きも、亦是に由りて推知すべし、即ち野蠻國民の理想は文明國民の理想の如く高からずと雖、我基督教に開發せられて、漸次其理想を高尙にしくとは、決して出来難き事にあらざればなり。

論者又各國風習の異なる點を以て、同一の宗教の各國に適合せざる重なる原因となす者あり、然れども是れ深く其實際を究めざる者の論あり、單純なる區別は直に之を證

明す、夫れ如何なる國の風習なりとするも、之を區別せば三種となる、曰く善き風習、曰く悪しき風習、曰く善くもなく悪しくもなき風習、例せば立禮と、坐禮との如き是なり、我基督公教は此三種の風習に如何の關係かある、善風良習ならば、之を稱賛して保續す、故に適合せざるの理なし、善くもなく悪しくもなき風習ならば、之を是非せず、故に亦適合せずと謂ふべからず、唯だ夫れ惡風惡習に至りては、我基督公教太く之を排斥す、否道理も亦之を排斥す、然れども道理の排斥する所は、即ち是れ矯正すべきの點には非ずや、矯正せば、我基督公教適合せざるの理わらんや、然りと雖、人若し惡風惡習を矯正するを欲せずして、單に我基督公教の適合せざるを云々するわらば、余復た何をか言はん。

理論によりて眞善の東西一貫、萬國同通なると、實に以上述ぶるが如しとせば、何故に實際に於て其眞善なる宗教が世界各國に行はれ居らざるや、其實際に行はれ居らざるは、即ち是れ同一なる宗教の世界各國に適合せざる確證にあらずやと云ふとは、讀者の腦中に自然浮び出づる疑問ならん、然れども此疑問を解くは易々たり、人知の弱點

と人心の腐敗を見れば、疑團は忽ち釋然として氷解すべし、人知の弱點とは何ぞや、未だ食はざるが故に其味を知らざる事、先入主となつて眞偽を判別する能はざる事等を云ふ、人心の腐敗とは何ぞや、傲慢、私利、情慾等是なり、是等の慾は何れも皆眞善を好まざるものなり、尙ほ切に之を云へば、何故眞善なる宗教を信奉せざるや、未だ能く知らざる者之あるが爲なり、否知るを欲せざる者あるが爲なり、何故知るを欲せざるや、(余は言ふを耻づ、然れども此疑問を解するが爲には、言はざるを得ず)、曰く傲慢に代ふるに謙遜を以てするを好まざるに由る、利欲を離れて仁慈を行ふを好まざるに由る、中にも其尤なる理由は、世間の遊戯肉情の歡樂を逞ふする能はざるに在るなりと、然らば則ち眞誠善良なる我基督公教の世界各國に行はれざる所以は、得て知るべきのみ、決して世界各國に適合せざるが爲にはわらざるなり。

世の論者の中には基督教は未だ一般に支那、朝鮮、西藏、暹羅、緬甸、印度、波斯、亞刺比亞等の諸國に行はれず、其行はれざる所以は基督教の是等諸國に適合せざるに由ると云ふ者あれども、是れ實に以上の事を究めざるに坐す、斯の如き議論は、如何

なる國にも盜賊あり、惡人あり、故に國法は如何なる國にも適合せず」と云ふと何ぞ異ならんや、苟も我基督公教の何を命じ、何を禁するかを見れば、其右等の諸國に行はれざる所以は、一目して知るを得べし、試みに看よ、偶像教に浸染し、酒色に沈溺し、一夫多妻を以て俗となし、強盜海賊を以て業となす者、右等の諸國に幾千萬もあり、此等の輩は皆我基督公教を嫌惡す、何となれば我基督公教は堅く是等の迷信濫行を禁ずればなり、然るに此を是れ顧みずして、我基督公教の右等諸國に行はれざる所以を、一に其適合せずと云ふ美言に埋没し去らんとするが如きは、是れ豈に正意誠心なる人士の心事ならんや。

實は我基督公教果して世界各國に行はれ居らずと云ふを得るや否や、假令我基督公教其物が其儘行はれ居らずとするも、其眞善なる主旨は他の宗教の名目の下に、人知らず行はれ居るにはあらずや、我基督公教を除くの外、東西各種の宗教は皆偽教なりと雖、其偽教なるものは豈全く誤謬偽妄のみを以て成立つものならんや、其間多少の眞理を含蓄するものあるは言ふを待たざるなり、眞理なる部分は即ち是れ我基督公教の

眞理なり、眞理に二つなし、偽教に在るも、我基督公教に在るも、毫も異なる所なし、但だ偽教は誤謬偽妄の中に多少の眞理を包含し、我基督公教は一點の誤謬偽妄なく眞理の全きを以て成立す、故に他教の中に含蓄せらるゝ眞理にして、我基督公教に在らざる者は、恐くは未だ一も之わらざるべし、是れ此眞理、如何なる名目を以て世界に行はるゝも、畢竟眞理其物なる我基督公教の行はれ居る所以にあらずや、(我基督公教の幾んど世界一般に公布せられ居る事實は、今姑く言はず)。

若し夫れ我基督公教に異なる點を舉げて、世界の一大宗教を組織せんと欲せば如何、余は斷言す、偽妄罪惡の一大土塊現出すべしと、然るに斯の如き心を以て世に立ち、世界の宗教は皆我良友なり、我は世界の諸宗教を打つて、圓滿なる一大宗教を組織せんと欲する者なり杯と公言憚らざる者、未だ天下に其跡を絶たざるあるは何ぞや、他なし、世界の人民の中には未だ偽妄罪惡の根治せられざるが爲なり、光明煌々たる太陽の光輝にも、尙ほ其影あり、眞理炳焉たる我基督公教の傍にも、尙ほ未だ偽教は其跡を絶たざるなり。

(二) 基督公教と倫理の基礎

世には淺薄皮相の見を以て、倫理の基く所と基督教の教ゆる所とは、氷炭相容れざる如く唱導するものあり、故に余は茲に於て兩者の異同を辯明せんと欲す。先づ倫理の基礎とは何の謂や、二あり、曰く善惡識別の標準、曰く善惡行避の基因即是なり。

(其一)善惡識別の標準とは、善惡の由て分るゝ定規となる者を謂ふなり、斯の如き者は何ぞ、性法即是なり、性法とは神の人心に銘刻したる永世不朽の大法にして、之を本心又は良心とも通稱す、故に性法なるものは、如何なる人の性にも、同手一樣に刻せられたるものなれば、國の東西によりても變せず、時の古今によりても更せず、所謂東西一貫、萬古不易の神法なり、若し倫理の基礎を斯の如き者とせば、我基督教は毫も之に矛盾するものにあらざるなり、然り、我基督教は、性法と一點一畫も異なる所なし、却て光明を與へて之を照らし、不足を補ふて之を充たしつゝ、層一層之を高尙にするものなり、東西の國民が均しく性法を其本心に有するにも係らず、國に

より、又人によりて、或は文明、或は野蠻の一大逕延あるは、蓋し之を證明して餘りあるなり、我基督教の能く行はるゝ邦國と時代は、人文發開、道義隆盛、洵に文明の邦國、文明の時代たるに耻ぢず、反之同教の全く行はれざりし邦國と時代は、人心酷薄、倫理紊亂、實に野蠻的慘雲の濃漠たる時世と謂はざるべからず、頭を回らして希臘羅馬の往代を看よ、夙に人知發開、文物隆盛を以て稱せられたるにも係らず、淫逸俗を亂し、驕奢風を成したるが上に、敵人を虐待し、奴隸を酷遇したるが如き野蠻的の慘行は、天下到る處に行はれたるにあらざるや、今日となりては即ち如何、奴隸の賣買を廢止し、自國の仇敵をも厚遇して、偏に文明的の言動あらんとを是れ務む、嗚呼是れ「汝の敵をも愛せ」と云ふ我基督教の主旨にあらざるや、縱令遠き古代に遡らざるも、縱令遠き海外の國を見ざるも、例は近く日本帝國に在り、前年日清の開戦は、日本國民の所爲實に文明の民たるを世界に發揮したり、強を攻め弱を助け、明を布き暗を照らし、敵を愛し捕虜を厚遇するが如き、皆是れ文明の所爲にして、優に我基督教の主旨に適へるものなり、余は此文明の所爲何れより來れるやを姑く言

はず、然れども是に由りて倫理の基本と我基督公教の主旨とは、決して氷炭相容れざるが如きものにあらざるを言はんと欲するなり。

(其二)善悪行避の基因とは、何の爲に善を行ひ、何の爲に惡を避くるか、其行ふと避くる目途を是れ謂ふなり、斯の如き目途とすべきものは三つ、利益、歡樂、名譽是なり、尙ほ詳細に之を云はば、吾人は何の爲に善を行ひ、何の爲に惡を避くるかと云ふに、利益あるが爲にあらざれば、歡樂となるが爲め、歡樂となるが爲にあらざれば、名譽となるが爲なりと云ふに在り、善を行ひ惡を避くる事、利益若くは歡樂の爲めたるときは、彼を行ひ、此を避くるは敢て難きにならず、蓋し利益歡樂の觀念は、善悪行避の苦勞を輕ふするを以てなり、然れども苦勞なき易々たる事は、以て功勳となすに足らず、人も亦之を善なりと見做さず、されば此事に就ては論ずるの必要なし、然れども善悪の行避が、利益歡樂と全く關係なき時に至ては、彼を行ひ此を避ると初めて一大難事となる、一大難事となるが故に、初めて功勳となるものなり、嗚呼斯る場合に際しては、何を目的として功勳を建つるを得べき、曰く一あり、名譽即是なり、

然らば即ち名譽なるものは利益をも棄てしめ、歡樂をも絶たしめて、萬事に價する一有力の緣由なりと謂ふべし、余は斷言す、世間一般の倫理の基く所は、實に此名譽に在るものなりと、何となれば世人が一身の利害をも顧みず、一家の浮沈をも意とせず、父母を棄て、妻子に別れ、一身國難に投じて、天晴れ大勳功を奏せんとする所以は、畢竟是れ生きては天下君民の稱賛を獲、死しては其名青史に傳はりて、永く後世子孫より仰慕せられんとするに在ればなり。

然らば則ち、我基督教徒の萬事を擲ち、一身を賭して鞠躬盡瘁する所以のものは如何、他莫し、亦是れ名譽あり、去れば我基督公教の教ゆる所と世間一般の倫理の基く所とは、同じく是れ一の名譽の點にありて、毫も異なる所なきが如くなれども、其所謂名譽には少しく徑庭あるを知らざるべからず、後者の名譽は天下の人々より來り、前者の名譽は高天の上帝よりす、人々の毀譽褒貶は誤なきを保せず、何となれば人は時として其毀貶すべき者と褒譽すべき者を知る能はざるとあり、良しや之を知ると雖、利害愛憎の觀念に驅られて、毀貶すべき者を褒譽し、褒譽すべき者を毀貶するが如きと

の必ず無きを期すべからず、嗚呼是れ實に孔子の天下に容れられず、ソクラテスの時人に毒殺せられたる所以なり、故に士の特立獨行にして、道を信ずる篤く、自ら知ると明なる者は、往々之を遺棄して顧みず、皇天に在る眼分明なる上帝より來る名譽に至りては、則ち然らず、彼は全智にして萬象を洞察する者、故に其毀譽褒貶には一點の誤なし、公義にして秋毫も偏頗なき者、故に其賞罰は信且必なり、全能にして萬事に不足なき者、故に其與ふる名譽は圓滿なるものなり、是れ實に純白眞誠の名譽なりと謂はざるべからず、而して吾人基督教徒の千艱萬難を排して享受せんと欲する所のものは、此名譽なり、勿論我基督教徒と雖、天下の人々より來る名譽を擯斥せず、寧ろ之を尊重す、然れども天下の人々の或は知らざるとあり、或は知つても譽めざるとあり、或は譽めても十分ならざるとあるを知悉するが故に、如かず皇天上帝の誤りなく、圓滿なる名譽を求めんにはと思考する者なり、然れども其求めんとするに當りても、名譽の一點に注目するよりは、寧ろ功勳の一點に着眼す、替言せば、其名譽を獲んとするよりは、其名譽を獲るに適せんことを是れ務む、蓋し上帝は全知にして一點の

誤る所なく、公義にして秋毫も偏する所なきを深く信すればなり。

是に由りて之を觀れば、我基督教徒の名譽と世人の所謂名譽とは、無論逕庭ありと雖、彼我均しく名譽の一點に在るを以て、二者相適合せずとは謂ふを得ざるべし、然らば則ち、倫理の基く所と我基督教の教ゆる所とは、氷炭相容れずと云ふが如きは、事實の實際を究めざる矯激の議論と謂ふべし。

(四) 基督公教と愛國心

基督教は愛國衷情に戻り、國家主義に反すと、是れ今日東西の學者を以て任せらるゝ者の屢々口にする所なり、然れども我基督教は果して愛國衷情に背反するものなるや否や、果して國家主義に悖戻するものなるや否や、是れ余の元來講究し見んと思ふ所、請ふ先づ愛國心の那邊に存するやを解説して、順次に之を論せんとす、蓋し紛々たる是非の議論も、往々單純なる一の定説によりて決定せらるゝものなればなり。(第一)愛國心を一つの感情として、之が定説を下すときは、故土の愛若しくは生地(愛(Cheritas patrii soli))なる者はなり、其故土生地なるもの大にして一國を成すに

至りては、其愛心も亦伸長して之に及ぶ、是れ之を愛國心 (l'amour de la patrie) と謂ふ、要するに愛國心とは其生出したる土地、成長したる邦國を愛慕する一つの感情を謂ふなり、此感情は人性自然の情にして、東西如何なる國土に住する者と雖、皆此情を有す、沙漠に住する者は其沙漠を愛し、氷海に住する者は其氷海を慕ふ、如何なる炎熱の地と雖、如何なる寒冷の土と雖、一たび茲に生れて人となるときは、忽ち愛すべき美國となるものなり、彼の氣候温和、山水秀靈なる邦國の人より之れを見るときは、如何にして長天雲なく、滿地烘くが如き土に安息し得るや、如何にして朔風凜冽、寒威刀の如き地に愛住し得るやと、一見奇怪に思はるれども、其土其地に住息する人より云ふときは、一時なりとも他郷に入りて安居するとは得ざるなり、土地磽确不毛にして、氣候中和を失し、棲息行動實に苦辛の土地なりと雖、其苦辛は毫も愛國の情を薄らげざる而已ならず、寧ろ是に由りて一層の度を高むるを見る、嗚呼是れ實に天の靈妙不可思議なる攝計に由て然るものにして、吾人性情の傾く處、知らず識らず茲に出づ、惟ふに天の此愛を吾人の心に注入したる者、決して偶然にはあらざるなり、

若し吾人にし此愛あからんか、人々皆氣候温和の一地に中集して、熱帶地と寒帶地は人の住むなき無用の土地たらんのみ、良し此兩地を無用ならしめずとするも、地球上の人民皆温帶の一地に集まるときは、如何なる不利、如何なる不便の結果を來すや測り知る能はざるべし、天は豫め此禍害を未萌に防がんが爲め、抗抵すべからざる一大磁石の力を以て、各人の足を其生出の土地に附著せしめたり、是に於て乎イスラントの氷海も、アフリカの沙土も寂漠無人の嘆なきを得るに至りたり、之を要するに天の此愛を吾人に與へたるは、父祖の居りたる土地に子々孫々の代まで吾人を植付けんが爲なりと謂ふべし。

我基督公教は此天性の愛心に如何なる關係かある、毫も關係なしと云はり、余は之を恕す、何となれば此心は人々天性自然に受くるものにして、宗教の惠與する賜にはあらざればなり、然れども全然之に背反すと云ふに至りては、黙々する能はず、我基督公教は此人間自然の性情を剝奪すとすか、性情を剝奪するが如きは不能の一事、固より我基督教の目的とする所にはあらざるなり、シヤトブリヤン云はずや「基督教は

吾人の性情を原罪の汚濁より洗滌して、之を人間大初の性情に復する者なり」と、然らば則ち此愛國自然の性情を一層清潔ならしめ、一層美麗ならしむる者は、正しく我基督公教なりと謂ふべきにあらずや、而して事實は之を證して餘りあり、試みに我基督公教の能く行はる、郷里を看よ、夫妻好く偕ひ、兄弟善く睦み、一家風波の起るなく、洵に琴瑟を鼓するが如し、父母は教旨によりて深く其子弟を愛育し、子弟も亦教旨によりて一層其父母に孝順を竭し、親子兄弟俱に共に清淨和樂の生涯を送くるが故に、其土地は眞に是れ地上の樂園、忘れんと欲するも忘る、能はざるなり、加旃ならず我基督公教國に於ては、別に又信仰上の樂なるものあり、其一例を擧ぐれば、初めて聖體の秘蹟を拜領する樂の如き即是なり、此樂の如何に大なるや否やは、彼の英名を天下に轟かしたる豪傑ナポレオンの明言によりて知らる、氏は一日侍座せる將校兵士に自身一生の至樂を問ひたる時、將校兵士等あらゆる往時の快戰、功業、凱旋、歡迎等を擧げて答へけるに、氏は皆之を打消し、最後に自ら語て曰く「我一生の至樂は幼時初めて聖體を拜領したる時に在り」と、蓋し人の幼けなき時感したる潔白の樂は、人間

一生の紀念となるが故に、其間如何なる快事に遭遇すると雖、決して之を忘る能はず、且つ老年に至つても其紀念を繰返すとは、無上の樂となるものなり、而して其所謂潔白なる樂は、往々是れ我基督公教によつて供せらるゝことを知らば、其愛國の心情を鞏固ならしむるに於て、如何程與つて力あるかを見るべきなり、宜なる哉泰西諸國に於ては宗教と國家の愛心を通稱して、鐘塔の愛心と云ふや、蓋し愛國心と愛鐘塔心とは、別語同義の熟字となり居るなり。

右は愛國心を小にして論じたるもの、所謂故土の愛、生地の愛として我基督公教と如何なる關係あるかを述べたるものなり、余は是より一步を進め、愛國心を大にし一國の愛として立言せんと欲す。

人皆其國を愛す、然れども何故に其國を愛するやと云ふに至つては、人皆一様に答ふ、曰く國なればなりと、蓋し國の一事一物を愛するが爲にあらずして、凡て國に在るもの、國に係るものを悉く愛するが故に、此れなり、彼れなりと指し示して答ふる能はざるに由るなるべし、乃ち是れ「國」と云ふ一字は、吾人の愛すべき萬事を包含するが

爲なり、(Omnes omnium caritates patria complectitur)、父母愛すべし、子女愛すべし、親友縁族愛すべし、同胞兄弟愛すべし、然れども是れ此の凡ての愛すべき者、一つの國なる語之を示して餘りあり、夫れ斯の如く、國と人とは密接の關係あるものにして、須臾も相離るべからざるを以て、國と人との福利光榮の如きも、亦同一となりて、國の福利光榮は己の福利光榮となり、己の福利光榮も亦國の福利光榮と見做さるゝに至るなり、故に人は其國の爲めには身骨を碎き、生命を致して鞠躬盡瘁するを厭はず、蓋し是れ己の爲めたるを知らばなり、斯る關係によりて一國の民皆愛國の鎖に連結せらるゝが故に、一朝事あるの曉に際しては、闔國舉つて一致協同するを以て、其力實に驚天動地の一大勢力ともなるなり、此勢を以て事業を計る、何事か成らざらん、此力を以て敵地に進む、何者か風靡せざらん、是に於て乎國利内に増進し、國光外に宣揚す、而して其國利國光なるものは、元是れ國民の一致協同より出でたるものなるが故に、個々人々としても其福利を福利とし、其光榮を光榮とするを得て、國と人とは一體にして、福利と光榮とは兩者に共通するに至るなり、例を前年の征清事件

に取りて考ふれば、當時日本全國の人民皆敵地に入りたりと云ふにわらず、入りたるものは單だ有數の將校兵士のみ、然れども其戰捷の光榮に至りては、均しく全國四千萬の同胞に歸するが故に、日本帝國萬歳を三呼して、人皆之を歡喜するを得るが如し、蓋し四千萬人の心は愛國と云ふ鎖によりて、國の爲めに一心となりたればなり、嗚呼此心は即ち是れ愛國心の上乗なるものにして、總ての徳業、凡ての功勳は、皆此に源由して出で來らざるはなし、文明國の公明正大なる愛國心と云ふも、畢竟此心に外ならざるを以て、人間の感情としては、此より高崇なる者、此より強大なる者、此より尊貴なる者は他に又之れわらざるべし。

我基督公教は此高崇、強大、尊貴なる感情に對する如何、同教の此世に存在して、世界各國に弘布せらるゝ所以は、斯る高崇、強大、尊貴なる感情を剝取するが爲めか、否々余は之に反して斷じて言ふ、我基督公教の此世に在る所以は、正しく斯の如き感情を一層高尙にし、一層完美ならしむるが爲めなりと、其故何ぞや、他莫し、國民ならば國民たるの義務を竭して、其住する國を汚さざらんを是れ事とすれども、我基督

教徒たるときは、其上尙ほ基督教徒たるの義務を竭して、其奉ずる道をも汚さざらんことを是れ努むればなり、國民としては強壯に、勤勉に、忠誠にすべき者、基督教徒としては完全無缺一點の過失なかるべき者なり、人若し或宗教が其信徒に向つて「父たる者は父たるの義務を竭せ、子たる者は子たるの義務を竭せ、官吏たる者は官吏たるの義務、兵士たる者は兵士たるの義務を竭せ」と、日夜に各人當行の義務を竭さんとを命ずるを見れば、其教の如何に完全なる人間を作爲するに務むるかを知らん、又同教が其信徒に對して「汝等平素は純正眞率、勤勉恭謙、身を修め行を正ふし、勞を取り務に服し、一日事あるの時は、正義の爲めに身命を擲ち、一死以て國に殉ずるの決心あれ、誠忠一片人知るなきも、皇天上帝眼分明なるぞ云々」と教ゆるを見れば、又其教が如何に愛國の衷情を高崇ならしむるに力あるかを知らん、而して斯く命じ、斯く教ゆる所の宗教は、即ち是れ我基督教なりと知らずや、故に言ふ、我基督教は愛國心を一層高尚完全ならしむるものなりと。

然りと雖我基督教行れしより、世の愛國心の少しく變易し來りたるは、争ふべからざる事實なりとす、我基督教の行れざる以前に在りては、人々往々世界一祖四海兄弟の實を忘れたるが故に、自國の外は總て是れ野蠻なるものと見做し、甚しきは他國の人民を人間とも思はざるに至りたるなり、然れども一朝我基督教が博愛主義を以て世に出るや、暴戾酷虐は忽ち其跡を絶ちて、公義仁恩之に代るに至りぬ、故に我基督教以前の愛國心は、土を畫し、境を限り、我國のみを國とし、我民のみを民として、偏に排異斥他の力を逞ふしたる狹隘の私心に外ならざりしが、我基督教以後の愛國心は全く之に反して、自國を愛すると共に敵國をも愛する一の寛大なる公義心とはなりたり、世の皮相論者は之を見て直に、基督教の所謂愛國心は地に限域なからしめ、國に封疆なからしめ、人に彼我なからしむる極めて渺漫浩盪なる愛國心なりと攻撃する者あれど、是れ實に偏癡不通の言なりと謂はざるべからず、我基督教は世界一祖四海兄弟を説いて、仁愛を敵國にも及ぼさしむと雖、決して内外の分を亂し、彼我の別を除くものにはあらじ、單だ世の愛國者が他國の人民を牛馬視して、往々暴戾殘虐を逞ふしたるを制するが爲め、愛國心に度を定め、順を立て、其過度に陥るゝ、

狹隘に失する患なからしめたるに過ぎず、我基督教如何に一視同仁を旨とすればとて、他國を先に愛して、自國を後にするが如きことを教へんや、愛は己れより初まる (charitas incipit a semetipso) と云ふ、我基督教豈之を知らざらんや、唯だこれ愛は狹隘なるものにわらず、該博なるものなり、酷薄なるものにわらず、寛大なるものなり、乃ち我基督教は此該博寛大なる愛國心を以て、世の狹隘酷薄なる愛國心を和けて、敵國に對しても大に隱忍容恕する所わらしむるに至らしめたるまでなり、是れ豈公明正大なる眞誠の愛國心にわらずや、論者或は如斯き該博寛大の愛國心は自他の區別を混同すと云はんかなれども、我基督教の愛國心は決して自他の區別を混同するものにわらず、第一に自國を愛し、次に他國に及ばすと云ふ一定の順序は確に之あり、人若し疑はば、請ふ此博愛主義を唱道したる教祖基督を視よ、彼れ一代の言動は明かに「先づ故國を愛して次に萬國に及ぶ」事實を證據したるものなり、知らずや彼が初めて天父の教を布き、救靈の道を説きたるは猶太の國なるを、彼は耶路撒冷城の滅亡を見て、之が爲に愛國の涙を灑きたり (路加傳第十九章四十一句)、預言して以て其滅

亡を免かれしめんことを務めたり (馬太傳第二十章二十七、三十八)、彼は十字架を負ふて、行步蹣跚として刑場に臨める時も、自身の艱難辛苦を忘れて、耶路撒冷の婦人に自國の子々孫々の爲めを思はしめたり (路加傳第二十三章二十七句より二十九句に至る)、彼れ十字架に懸けられたるや、固より世界萬民の爲に其寶血を流したれども、故國の頑民も悔悟すれば助かるを知りたるが故に、特に彼等の爲に天父に祈られたり、彼は世界の救済主の資格を以て降生したるが故に、地球上の萬民の爲を計りたるは勿論なれども、別して猶太と云ふ故國を愛して其民の爲を計りたる跡は、如斯く歷々として指示するを得るなり、故に後日其弟子を遣して、教を萬邦に弘布せしむる時にも、先づ耶路撒冷を以て始めしむ、弟子も又師の意を體して、東西何れの國に到るも、若し國內に猶太人民の在るわらば、先づ之を教ゆるを以て第一となしたり、人若し使徒保祿が羅馬人に送る書を讀まば、同徒が如何に猶太人民を愛したるかを知るべし (送羅馬人書第九章の一、二、三)。

是に由りて之を觀れば、我基督教の愛國心には、一定の順あるが故に、自他の區別

を混同するが如き恐れなき事、又一定の度あるが故に、自國の同類にのみ私して、他邦の人種を禽獸視するが如き酷虐に失するの憂なき事明々白々たり、要するに、我基督教は人間社會を二様に見る、曰く世界、曰く一國、世界としては、廣大なるが故に、其之に及ぶ愛は自然薄し、一國としては、狹少なるが故に、其愛は一層深くなるものなり、我基督教の世界觀實に茲に在るが故に、其愛國心なるものは世の所謂愛國心とは自から趣を異にせざるべからず、是故に各國の歴史を繙きて古今の事跡を考ふるに、我基督教の世に出でたる以前と以後とは頗る異なるものあり、例へば希臘羅馬の古代を視るに、忠誠義勇の士なる者多く之ありたりと雖、其所謂忠誠義勇の士なる者は、偏へに己の國の爲のみを思ひ、自國の事ならば之を神國とまで稱し、甚しきは神と共に國を合祀するに至りたれども、他國の事ならば一切野蠻蒙昧と見做して、虐殺屠戮毫も顧みる所あらざりき、苟も希臘兩國の歴史を一讀したる者は、此兩國の人民の暴戾掠奪の蠻風に酸鼻せざる者なからん、小國を呑み、弱邦を併せ、敵國の神佛は皆之を自國に檻送して、ジユピテル大神の屬神となし、敗邦の人民は咸之を羈縛

して、或は牛馬の如く市城に賣買驅逐し、或は又無情にも之を「カピトリウム」の斷崖より顛墜虐殺したり、其酷逆殘忍の慘狀今より之を想起するも、尙ほ且つ毛髮の悚然たるを覺ゆ、然れども此は是れ愛國忠勇の士の最も多しと稱せられたる國にてありたるを忘る可からず、而るに我基督教の初めて世に出づるや、局面頓に一變して、仁恩と公義は初めて世に行はるゝに至りぬ、故に同教徒の武人は由來舊怨宿敵たりども之を欺待するを以て一つの名譽となしたるものなり、其戦ふや勿論身命を賭し、死力を盡して戦ひたれども、敵の驍勇にして侮るべからざるを見るときは、戦勝の後も必ず之を豪傑らしく厚遇したり、即ち勇を以て敵に勝ちたるが如く、義と愛を以ても之に勝たんと欲したるは、由來我基督教徒武人の心事にてありたり、故に開明の國に於ては眞誠の豪傑と稱せられたる者は、愛國心の豪傑たると同時に亦愛宗心の豪傑にてありにき、シャルレマン大帝を始め、ルイ第九世、バイヤール及びガルシヤ、モレノ等皆其人なり、是を以て愛國忠勇の豪傑と基督教徒と云ふ語は、兩々相對する一般の熟字となりて、義と勇を盡したる武人の特質を示したり、彼の豪傑ナポレオンが己の

生兒を在廷の貴婦人に託するに當り、「我れ此兒を貴下に託す、願くは此兒をして良基督教徒たらしめ、良佛國民たらしめよ」と語りたる時、左右の訝り怪むを見て、再び語を繼ぎ、「我は良基督教徒たらずんば、良佛國民たる能はずと確信す」と言たるは、蓋し亦茲に見る所ありたるが爲なり、己の生兒を寄托する時の語、豈之を一時の戲言と見做すを得んや、然れども人若し我基督教の仁愛は眞誠愛國の義勇と相合はずと思ふあらば、請ふ前年の日清戦争を看よ、日本帝國の君民が清國の敵に對して、斯く寛大の恩遇に出でたるは、是れ古の愛國心の散渙したる爲なるか、却て是れ古の愛國心の一層文明的となりたるの明證にはあらずや、然り而して我基督教の愛國心は即ち是れ毫も此愛國心に外ならざるなり、基督教は愛國心を散渙消滅せしむる杯と唱道する論者、少しく茲に考ふる所あれ。

(第二)愛國心を人間一般の感情として、之を我基督教に對照し見るときは、其兩者の決して相合はざるなきと、實に以上述ぶるが如し、余は尙又一步を進め、愛國心を實際の上に觀察して、我基督教と如何なる關係あるかを論せんとす。

愛國心を實際の上より考察して云は、如何、曰く公の爲に私を棄て、國の爲に己を忘れて働く事是なり、所謂國の公益の爲には身を献じ、命を献じ、身邊一切のものをも献じて、毫も己と己の利害得失を顧みざるとなり、一言以て之を言へば、棄私殉公の赤誠を謂ふなり、然らば則ち此棄私殉公の赤誠に正反對するものは何ぞや、言はずして知る是れ利己心なるを、利己心とは公の字を被りて私の益を計り、他の名を假りて己の利を是れ求むるとにして、之を愛國心に對照して云ふときは、己れ一身の利益の爲に國家を弄する事是なり、世には爵祿名利を目的として其國家を愛する者往々にして之あり、彼等は大聲疾呼して愛國の二字を公言すれども、其實愛國者にはあらずして寧ろ自愛者なり、自愛者は國家の蠱毒なり、若し夫れ一朝國家が己の目的に反するあらんか、彼等は忽ち野心を起し、憤怨を懷き、謀反を企て、内亂を醸して、往々自國の社會に一大禍害を加ふるに至り、此時初めて國家の公敵なるを認めらる、然らば則ち利己心と愛國心とは不俱戴天の仇敵にして、彼れ倒れざれば此れ倒れ、二者到底兩立すべからざるものなり。

我基督教は即ち如何、利己を勸むる者か將た愛國か、我基督教が傲慢を抑へ、利慾を絶たんが爲めにあらゆる手段を用ゐ、義務を竭さしめ、善徳を行はしむるが爲めに未來永遠の光榮を約して身邊の萬事を暗せしめ、尙又他人を愛する己の如くせよと朝暮に教へつゝあるを見れば、同教が如何に利己心を除去するを是れ事とし、如何に棄私奉公の赤心を注入せんを是れ務むるや、多言を待たずして明かならん。

人或は云ふ、思を未來に屬せしむるは現在を忘れしむる所以なりと、是れ我基督教の深意を知らざる膚薄淺露の説のみ、我基督教が吾人に未來あるを思はしむるは、決して坐禪的に祈禱のみを黙誦して、此世の義務を坐忘せしむるが爲にはあらず、(萬一同教徒中に斯の如き人あらば、是れ其人の過誤にして教の本主旨にはあらず)、天上永遠の幸福を想見せしめて、現在の義務を忠實に竭さしむるが爲なり、故に國民にして我基督教の熱心なる信者は、必ず愛國の衷情に深き者となるなり。

(第二)世の學者又云ふ、基督教は國家主義に悖戻すと、其説に曰く「耶蘇は國家の事を思はざりき、又國家に就て理想をも整理法をも興へざりき」云々と、嗚呼是れ果して何の言ぞや、請ふ余をして此言を分拆して答へしめよ。

基督教は果して國家の事を思はざりしや、先づ一家の事より云はん、苟も彼が積極的に一夫一婦の道を正ふし、人倫の大綱たる婚姻を聖ふして、之を一結不離の制となし、消極的には離婚を禁じ、姦淫を禁じ、又蓄妾を禁じて、一家をして風波の害なからしめたるを見れば、誰か彼を目して家の事を思はざりしと云ふを得るや、然らば國の事を思はざりしと云ふか、先づ國の事を思ふとは何の謂ぞ、各國の境界を劃して、國々の政體を定むるを謂ふか、或は又人々に斯々の國體を保持せよと指教するとか、果して如斯き意義ならば、基督は實に國の事を思はざりしなり、蓋し彼は政治家の資格を以て寰區に降生したる者にあらざれば、政態の如何、國體の如何の如き事には敢て喙を容れざりき、政態の如きは君主政にするも、貴族政にするも、將又共和政にするも、道理に於て毫も關せざる所なり、又各國の人民が如何に其國體を異にするも、同一なる宗教を遵奉するに於て、何の妨も之なければ、是等の事は一に各國民人の自由に任じたり、然れども國の安危存亡の繫る一大原理に至りては、彼明かに之を公示したり、

請ひ問ふ其一大原理とは何ぞ、曰く公義(Justice)即是なり、國運の隆盛、國民の安寧には二道なし、唯だ此公義あるのみ、然らば則ち彼は國の最も大なる事を思ひたる者にはあらずや、要するに基督は國家の小なる事は思はざりしと云ふを得るも、國家の大なる事に至りては、疾くより之を思ひたり、さればこそ斯く一家の基礎、一國の大道となるものを制定公示したるなれ。

國家に就て理想をも整理法をも與へざりしとは真か、抑々國家なるものは(其政態の如何に係らず)、何に基くものなりやと云はゞ、人必ず云はん、法律、權利、服従、義務、賞罰是なりと、基督の教旨によりては如何、曰く(第一)立法者の心を高天の上より照して、其禁令すべき事に就て一步も誤らざらしむ、されば其法律は正ふして眞個に「爲すべき事と爲すべからざる事の規定」となるにあらずや。(第二)總て人の上に立つ者は其名稱の如何に係らず、臣下の幸福を計るが爲に神の代理となりて、其權柄を天より受け得たる者なりと教ゆ、されば其權利は聖ふして眞個に「民の善を勧め惡を制するに足る一大能力」となるにあらずや。(第三)既に法律正しく、權利聖く、彼を制

定し此を把持する者又天よりすと云ふ、されば民も亦天によりて之に服従するが故に、其服従は上の壓制に出づる強服にはあらずして、下の尊敬より出づる眞正の心服たるにあらずや。(第四)然り而して人々相互の義務に至りては、「父母に孝行すべし、人を殺すべからず、邪淫を犯すべからず、偷盜すべからず、偽の證據を立つべからず」等の誠命を掲げて、日夜に之を覆誦實行せしめつゝあり、されば人は是に依りて不義を犯さず、不正を行はず、人の人たる義務を全ふするを得るにあらずや。(第五)若しこれ賞罰に至りては、上文に述べたるが如く、全能全知、至公至義なる天帝上に在り、其眼分明にして冥々の裡まで洞察すと教ふるが故に、其賞罰は公明正大にして、一善賞せざるなく、一惡罰せざるなきに至るなり、我基督公教の國家に對する理想なるもの整理法なるものは、實に以上の數項に存す、嗚呼亦至れり盡せりと謂はざるべからず、故に余は是に於て斷言す、我基督公教の行はるゝ程度によりて、個人も國家も相共に完全に成立し、相共に高尚に發達し行くものなりと、世の學者之をしも猶ほ國家主義に悖戻すと云て排斥せんとするは、我その何の意たるを知らざるなり。

(第四)余は前段に於て、十分我基督教の教旨の存する所を發揮して、其秋毫も國家主義に悖戻するなきを證明せり、今や此第四段に於ては、基督教を非國家主義なりと攻撃する者の人と爲りを一言して、尙ほ余の前論を確證せんとす。

我基督教を以て國家主義に悖戻すと唱道する學者は誰ぞ、皆是れ秘密結社に加入して、我基督教を一大障害物と見做す所の唯物論者なるは豈奇ならずや、此唯物論者の目的とする所は如何、東西各國の區別を悉く平掃して、平等の社會を組織せんと企圖するに在り、余は幸ひにして同結社の秘密なる目的を聞くを得たれば、左に之を掲載せむ。

同結社の黨員が國の全部、或は其一部を改革せんが爲に一致協力すと云ふが如きは、宛も是れ同黨員が美麗なる靴を製作せんが爲に密に相集りて企議すと云ふと一般、實に笑止千萬の次第なり、苟も同黨にして斯く思はざる者あらば、是れ毫も同社の事を知悉せざる者たる而已ならず、健全なる頭腦をも有せるや否やを疑はしむべき者と謂はざるべからず(ヒシトの言)。

吾等の企圖する目途は、吾等をして全く自國社會より分離せしめざれば、決して之を成就するを得ざるものなり……何となれば各國各種の情態を改變して、萬民一般の共政體にする事なればなり……故に吾等は吾等の係屬せる社會を脱して、自國固有の狹隘なる私心を離脱すると最も必要なり(同氏の語)。

若し同一の意見を懷て同黨に加入し、人類一般の幸福を目途とせんと欲する新入者あらば、須らく天下到る處に其全力を盡して、凡ての個人的感情、分離的原子を自他の上より剝取せしめんが爲に戦はしめざるべからず(同結社中の有力の一氏セイデールの言)。

現今の秘密結社は、四海兄弟を以て其唯一の目的として唱道す、其全力の注ぐ處は、一に階級的先入、人種、原始、言語、國粹等の區別を國民の中より剝奪せんとを務むるに在り(レポールドの語)。

同結社の唯物論者が斯の如く唱道する所以のものは何ぞや、他莫し、國家を己れ一個の利欲の爲に充てんとせる一大野心を隱蔽せんが爲に、之を我基督教の世界一祖、

四海兄弟説に歸せんと欲するなり、彼等の目的とする所は、宗教の外皮を被りて國體を毀損し、愛國心を抜き、國家を平等にして、己等一身の生計を立てんとするにあり、然るに我基督公教が吾人に其信仰すべき者を定め、希望すべき者を定めて、社會の階級によりて各人當行の義務を竭さしむるを見て、己等の大眼目とする利己に正反對すと知了するが故に、之を一大障碍と見做し、滿腔の力を注いで之が排斥攻撃に従事するものなり、愛國心の最も盛なる國に於て、最も我基督公教を攻撃しつゝ、「基督教は非國家主義なり」杯と喧々するは、蓋し又是れが一證として見るべし、然れども余は豫め茲に斷言す、唯物論盛なるに従つて利己心も亦盛となり、利己心の盛なるに従つて愛國心は遂に散渙消滅に歸せんと、何となれば未來に於て何を信せず、何を希望せざる者は、何によりて國家の爲に働くを得るか、余の得て知るべからざる所なればなり。

(五) 基督公教と折衷主義

今日世の學者を以て自任する者の言に曰く、今の時は東西各種の哲學及び宗教を研究して以て眞理を明にすべきの時なり、余の方針は東西各種の思想を參酌し、熔鑄して、新に組織を成さんとするに在り云々と。

又自由討究を以て世に立つ一種の宗教家の説に曰く、世界の宗教は千差萬別各其形狀を異にすと雖、均しく是れ圓滿なる一大宗教の一面に過ぎざれば、之を打つて一大彈丸となし、以て完全なる宗教を組成するを得べし云々と。

皮相の見より考察するときには、斯の如き説は大に人心に膾炙して誠に雄壯なる企圖と思はるゝなり、蓋し之を大にして云はゞ、東西の哲學に涉獵して理否を研究し、古今の宗教を對照して眞偽を取捨すと云ふが如きは、博覽強記の名を博するに最も恰好なる事業、之を少にして云ふも、古人の遺書を繕ては其美を抜き粹を擇び、名家の玉章を閲しては、其英を含み華を咀ふと云ふが如きは、又是れ美術的思想に善く適合する事と思はるればなり、然れども。

今哲學的眼光を以て詳に之を觀察するに、如斯き事業は宛も是れ片々たる木材を四集して、砂上に輪奐たる樓閣を築かんとすると一般、到底徒勞たるを免れざるなり、

夫れ之を据付くる基礎的の原理もなく、之を總合する論理上の連絡もなくして、焉んぞ能く完全圓滿なる哲學、宗教を組成するを得んや、彼此一定せず、前後一貫する能はざる異論異説を如何に參酌し、如何に鑄鑄すればとて、恐くは眞誠なる哲學、宗教の一節をも確立するを得ざらん、良し古來斯の如き事業を企圖したる學者之ありとするも、又斯の如き事業の實際行はれたる時代之ありたりとするも、余は之を企圖したる人物の頭腦の薄弱、此事の行はれたる時代の澆季の衰世たりしを斷言するに於て毫も躊躇せざるなり、此の如き事業は人智微弱となりて、碩學鴻儒の寥々たる時代に於てのみ夢想せらるゝものなり、何となれば苟も書を讀むとを知るものあらば、一介の書生と雖尙は能く之を企つることを得べければなり、然れども世には此の如き説を唱道して、己れ東西の學に通じ、古今の教に明なるを誇り、區々たる一部の學生より博學と稱せられ、多才と讚せらるゝを以て得々たる者あるは、誠に憫むべきの至なり、眞誠なる偉大の人物より之を見るときは、此の如き者は博識と稱せらるゝかは知らざれど、眞の學者とは決して思はれざるなり、何となれば其唱ふる折衷説の如きは、洵

に取るに足らずして、書の讀める一介の學生にだも出來得べきとなればなり。然れども均しく是れ折衷主義と云ふと雖、其中には眞誠なる折衷主義なきにしもあらず、蓋し東西古今の哲學、宗教を比較對照し見るに、無論事によりては相同じく、事によりては全く相異なる所あるべし、然れども此異同の中には又自から一大原理なる者含蓄し居るものなきにあらず、唯だ此一大原理が哲學、宗教の種類によりて、種々に化け、又様々の誤分子を混じ居るのみ、例へば神あり、靈魂ありとの二大原理は、概ね何れの宗教哲學にも承認せられざるはなし、然れども宗教、哲學の種類によりて、神は或は天、或は地、或は日月星辰、或は山川草木、或は又木像石像に在りと云はるゝが如く、種々様々に認定せらるゝなり、靈魂の如きに至りても亦然り、或は心なりと云ふ者あり、或は血なりと云ふ者あり、或は氣の如きものなりと云ひ、或は火の如きものなりと云ひ、諸説紛々、何れか是、何れか非なるを知る能はざらしむ、夫れ如斯く神あり、靈魂ありと云ふ眞理は何れの宗教、哲學にも均しく認定せられながら、其宗教、哲學の如何によりては、種々様々に化けて、千態万狀の誤分子を混同し居るな

り、今其化けたる外皮を去り、混じたる誤分子を除きて、其中に潜める母なる真理を捕促せんと欲するあらんか、是れ實に哲理的の眞誠なる折衷主義と謂ふべし、古代の偉大なる哲學者は嘗て此折衷主義を行はんとを企圖したるものなり。

即ち古しプラトン派、アリストット派、ゼノン派、エピクル派等の諸派ありて、相互に宇宙の眞理を研究したる時には、希臘の哲學は實に其隆盛の極度に達し、最早や他に眞理の講究すべきものなき程に至りき、是に於てか後の哲學者は右四派の中其尤も有名なるプラトン派とアリストット派の二派を採りて、彼此相比較折衷せしに、其中に合ふ所もあり、合はざる所もありたる故、其の合ふ所を合せ、其合はざる所を捨て、完全なる一大哲理を組成せんとしたるなり、然るに偶々羅馬が牛耳を執りて歐亞の天下を一統するに當り、埃及、波斯、印度等の古代哲學及び其宗教が一時に混入し來りたるを以て、時の哲學者の研究すべき範圍も又茲に一層廣大となりぬ、當時アレキサンドリヤは歐亞の中央に位して、天下の學林となり居たるが故に、東西の哲學宗教等も亦皆此一府に輻集したり、其中には怪訝なるものあり、斬新なるものもあり、

珍奇なるものもありて、頗る當時の學者の見聞を博ふせり、是に於てか時の哲學者は是等東西の諸哲學、諸宗教を研究して、美を抜き粹を擇びて、東西の國民に適合する一大完全なる宗教、哲學を組織せんと企てぬ、爲めに是等折衷の事は當時の一大事業となり、學者往々之を以て己れの一大企圖となして高言慢語し居たり、蓋し初めて事に茲に従ひたるものはフイロンと云へる高名なる哲學者にてありき、氏は固より東西各種の思想を參酌して、一大完全なる説を立つる意なりしが、其説は自から他と趣を異にしたるを以て、茲に又フイロンなる一新説現出するに至りたり。

然るに此説果して首倡者の企圖したる如く、世界の知識を總合して、天下の學者を満足せしめたるや否やと云ふに、事實は大に之に反し來れり、何となればフイロンの説一たび現出するや、當時の學者東西より之を攻撃し、排斥し、諸説紛々、甲論乙駁、人々皆相互に他の説を排撃するに巧なれども、敢て一人己れの説を創設するを得ざりき、ルソーの所謂「破却するには有力、自説を立つるには微弱」なりしかば、折角の完全なる折衷説も反つて茲に一層の混乱を來すに至りぬ、去れば此完全なる説も

アレキサンドリヤの天地を出づる能はずして、空しく喧々囂々の中に消滅するの悲運に遭遇したり、故に今日に至るまで人は稱す、曰く「塵埃は強風の裡に飛んで散乱す、圓満なる一大新説は甲論乙駁の中に消失す」と。

何故斯る一大企圖は實際行はれざりしや、他なし、彼等は標準とすべき眞理を確知せずして、單に眞理を知らん事をみの是れ務めたるに由る、凡そ一事に就ひて眞偽を採否せんと欲するには、須らく先づ如何なるものが眞なるやを知悉し置かざるべからず、而るに彼等は此事を知らずして此事を企てたるが故に、其企圖は遂に一沫の水泡と消へ去りたるものなり、例を擧げて之を云はんか、神と靈魂とは宗教、哲學の二大眞理なり、此二大眞理を確知せずんば、焉んぞ眞理の斷片を折衷し、總合するを得んや、而して彼等古の哲學者は此二大眞理を知悉し居たるや否や、請ふ先づ彼等の神性に就て論せる所を看よ、シセロの所謂「愚暗は哲學の基礎、不確は之が究極」の語の誠に吾人を欺かざるを見ん、ターレス曰く「神は水に配合して、之を助動體として使用する一の智能なり」、ピタゴラ曰く「神は森羅萬象に潜伏し居る廣大無邊なる靈魂なり」、

アナキシマンデル曰く「神も死生するものなり」、或る者は曰く「否、神は永遠不死の者なり」、デモクリトは神の變遷代謝するを主張して、遂に地上より其片影をも除去するに至りぬ、アナクサゴラスは曰く「神は肉體なき無限の精神なり」、ゼノファンヌは曰く「智能に配合せる無限其物なり」、バルメニード曰く「宇宙の統治者なり」、クロトニヤト曰く「神は天の日星と人の靈魂の中に在り」、セノクラトは曰く「日星の中にのみ在るなり」、ヘラクリト曰く「世界は是れ神なり」、エンペドクル曰く「否、四元素なり」、テオフラスト曰く「神は天と星宿との中に在るを見る」、ゼノンは曰く「我れ俯仰天地の萬象を觀察したれども、所謂神なるものを何處にも認めず、故に我は無しと斷言す云々」と、それ眞理の標準ともなるべき神に就てすら、其知悉するを得ざると實に斯の如し、靈魂の性質に就ては如何、嗚呼余は亦彼等が此點に就ても空しく喋々の愚論を戦はしたるを見るのみ、一部の哲學者は曰く「靈魂は心の別名たるに過ぎず」、エムペドクルは之を否定して曰く「否、靈魂は心にあらず、心を沐浴せしむる血を謂ふなり」、他の哲學者は曰く「靈魂は頭腦と異なるものにあらず」、ゼノン曰ふ「靈魂は火

なり、アリストキセスは之を「神經の作用」に歸し、ゼノクラットはピタゴールと共に之を「一の數なり」と主唱す、而して彼の哲學の泰斗と景仰せらるゝアリストートルの高見何れにありしやを叩けば、彼は云ふ「靈魂は五元素を以て成立つ者なり」と、古今獨歩の哲學者の説にして既に斯の如し、然らば則ち自餘の説推して知るべきなり、嗚呼實にシセロの言へる如く「神にあらざるは、到底之が眞偽を識別することを得ざるものなり」、余故に云ふ、眞誠の折衷説は、神にあらざれば之を行ふ能はずと、往古既に行はれず、今後亦必ず行はれざるべし、此説若し今日の學者によりて行はるゝものたらば、最早二千有餘年前の古に於て盛に行はれたるべし、今日の學者誰かプラトンに比肩する者ぞ、誰かアリストートルに併立する者ぞ、良し比肩併立する者之ありと假定するも、古のプラトン、アリストートルの能はざりし所は、今日のプラトン、アリストートルにも能はざるや必せり、况んや一介の白面書生の如き者、唯東西の書物讀めると云ふ丈けの能事あるのみにて、曾て高遠の識見もなく、深邃なる頭腦もなき者に於てをや、彼が漫に大言壯語して、我身一ツを以て此説實行し得べきが如く主唱するは、適々以て識者の一笑を招くのみ。

然るに奇なる哉、我基督公教(即ち是れ神立の宗教)の世に出づるや、古今將來の學者の實行すると能はざる折衷説は、不思議にも自から行はるゝに至りたり、而して今尙は行はれつゝあり、將來も我基督公教の續かん限り、必ず相共に行はれ行かんことを是れ果して何の故ぞ、他莫し、我基督公教は一方よりは天啓によりて彼の基本となるべき二大眞理を確知し、他の一方よりは哲理の敵にあらすして、寧ろ之が良友たるを以て、人知の誤謬を正し、罅漏を補ひ、幽暗を照らし、以て其眞理の部分を啓導保續し行かんことを是れ務むるものなればあり、蓋し總ての宗教哲學皆眞なりと云ふを得ざるは勿論なれども、爲めに皆偽なり、些の眞理を含むなしとは云ふ能はず、而して渾身眞理を以て成立つ我基督公教は、眞偽を識別すると極めて容易なるを以て、其確知する所の二大眞理を標準として、他の總ての宗教哲學を照らし、其合を合とし、其不合を不合として、捨つべきは之を捨て、採るべきは之を採つて、永く之を天下後世に保傳するが故に、古來哲學者の説も我基督公教の驥尾に附して、初めて千里に達する

を得たるものなり、要するに我基督教は其確知する基本的真理の下に、古今東西の宗教、哲學の謬戾を攻撃しつゝ、其片々たる真理の部分を保存するが故に、古來の學者の企圖して始終空想に歸したる、又今來の學者の企圖しても究極空想に歸すべき此折衷説を實際に行はしめ居るものと謂はざるべからず、事奇怪の如く聞ゆれども、是れ事實なり、事實は争ふべからず、打消すべからず。

古今の學者に能はざる折衷説、我基督教に行はると云ふと雖、是れ我基督教の學者が教外の學者よりも博學多識なりと云ふ爲にあらず、彼のプラトン、アリストートル、シセロの如き者は、恐らくは我基督教の學者の中にも其比を見ざらん、オグスチヌス、トマス、ボヌエ或は之に比肩すべき歟、然れども是等教會の學者が、前記の哲學者に遠く優れたる所以は、我基督教の恵によりて大原理を確知するを得たるが爲なり、斯る大原理を確知するを得たるが故に、如何なる宗教、哲學を瞥見するも、直に其眞偽を識別して捨僞取眞の道を行ふを得たるなり、蓋し想ふに、教學者の多くは知らず識らず此折衷を行ひたりと、何となれば我基督教の教理を世に發揮闡明するに

當りて、往々古來學者の名言卓論を引證したるを以てなり、是に於てか教外學者の真理の斷片は、我基督教の教理と合して一となれり、然れども故さら事に茲に従ひたる者なきにあらず、其尤も有名なる者二人あり、オグスチヌスとトマス即ち是なり、前者は第五世紀に傑出し、あらゆる當時の哲學を悉く尋究したるには相違なければ、就中プラトン、アリストートルの哲學に専ら心を潜めて、彼れの高閣に達し、此れの堂奥を伺ひ、道理と黙啓とを以て普く之を照らし、人智の達する所、幾んど究極せざるものなきに至れり、且つ當時に至る迄の異教と云ふ異教、邪教と云ふ邪教は、悉く之を開て廓如たりしを以て、氏は實に真理の一大燈明にして、又百怪の一大鐵槌にてありにき、後者は第十三世紀に隆起し、オグスチヌスと講學其趣を異にしたれども、今迄人智を以て測知するを得たるもの、細大遺漏なく之を深究遠紹し、遂に世界の萬學を一括して、空前絶後の一大完典を作爲したるは、其功實に萬古に不朽たるべきなり、今日全世界の教會より一大世光として瞻望景仰せらるゝ者洵に以あるなり、爾來教皇ピオ第九世及び今代の教皇レオ第十三世の教勅書を見るときは、亦是れ異端

邪説を排斥して、正理公論を闡揚したる一種の折衷説と云つて可なり、去れば我基督公教は其創立の當時より一千八百有餘年後の今日に至るまで、絶へず折衷主義を實行し居るものと謂ふ可し、斯の如き折衷主義は我基督公教に於てのみ行はるゝものあり、何となれば我基督公教のみ神の默啓によりて真理の標準を確知するを以てなり、苟も神の教を基礎とせざるあらば、後世如何なる大學者起るも、余は到底此折衷主義を行ふ能はざるを斷言す、神を省かば真理の基礎を省くものなればなり、真理の基礎を省きて、東西各種の宗教、哲學を建築せんとす、豈得べけんや、善い哉シセロが「神にあらざれば眞偽を識別する能はず」と叫びたるや、ソクラテスが「神來りて吾人を教ふるを待たざるべからず」と云ふ語も、亦此に至て益々徴あるを覺ゆ。

(六) 宗教と教育

宗教と教育とは果して衝突相容れざるものか、將又兩つながら相待ち相助けざるべからざるものか、事頗る蹊錯せる疑問に屬す、故に之を解くには、須らく先づ兩者の何物たるを確定せざるべからず。

教育 人の初めて此世に生るゝや、其躰至て微弱なり、其智至て薄弱なり、是に於てか、躰育、智育の必要起る、然れども人は禽獸と異なれば、尙又人たるべき道を竭さるべからず、乃ち亦茲に德育なるもの、必要を見るなり、教育の二字は即ち此體育、智育、德育の三つを包含する語にして、吾人人類をして弱より強に導き、愚より賢に導き、惡より聖に導き、所謂肉身靈魂を鍛練啓導して、完全なる一個の人物を製作するが爲め、須臾も缺くべからざる要道なりとす。

宗教 人と生れて此一大天地に立つや、須らく其由て來る所、歸して着する所を知究すると同時に、何を以て其出てたる所に歸すべきや否やの方道をも講せざるべからず、是に於てか宗教の必要認めらる、宗教なるものは實に是れ吾人人類の本原、終末、及び此本末に處する手段を備ふる一大要具たり。

是に由りて之を觀れば、教育は人物を完全ならしむるの要道、宗教は教育によりて完全したる人物を其歸着すべき終焉の目的に達せしむる要具なりと謂ふべし、教育宗教の區別、及び兩者必須の關係、是に於てか一目瞭然たり、尙ほ兩者の區別と關係とを

一層明知せんと欲せば、有名な々彼のバスカルの感想を讀むべし、氏は爾く感想す、曰く「人此無限の天地の間に介立し、體、智、徳の三育を充分具有して、宇宙の茫々を究め、森羅の萬象を講ずるも、孤燈半夜靜に己れの身に省みて、我は何の爲め此茫々たる天地に生れ落ちたるや、死して後は果して如何に成行くべきや、生前に於ては何を爲さざるべからざるや、之を教育に問ふ、教育黙々たり、時に或は揣摩の説を加ふ、然れども満足の答を得ず、然らば則ち何によりて之が満足なる答を得んや、宗教なるもの之に應じて初めて満足す云々」と、嗚呼心あつて氏の感想を感想する者は、明かに教育は人物を鍛へ、宗教は其鍛へられたる人物を行くべき處に行かしむるものたるを知ると同時に、教育によりて人如何に完全なるも、宗教によりて其果つべき處に果つるを知らざる時は、到底其心を満足する能はざるを見ん、知るべし宗教なきの教育は、人心を満足する能はざるものたるを。

宜なる哉人は交際の動物に生るゝと共に、又宗教的動物に生れたりと云ふや、交際の動物とは、有名なる哲學の泰斗アリストートルの語、▲皆之を疑はず、宗教的動物の語は、古今東西の人心之を證す、「人の心の宗教を要する猶其肉體の五穀を要するが如し」と、格言抜くべからず、而して余は此二つの事實によりて、教育宗教の必要缺くべからざるを見るなり、交際の動物に生れたるは、吾人教育によりて相共に掖誘啓導せられざるべからざる所以、宗教的動物に生れたるは、宗教によりて本末歸終の道を講せざるべからざる所以なり。

人或は世には無神論者ありと云はん、然れども余は其決して心からの無神論者にあらずして、一時の利害若しくは一身の情慾に驅られて姑く無神論を唱道する者なるを斷言す、その證據は彼等が苦しき時に神頼みするを見て知らる、良し心からの無神論者之ありとするも、是れ人間の例外物にして、猶ほ社會に異變の人物あるが如く、動物界に異類の怪物あるが如く見做すを得、一般人民としては皆生來宗教心あるべき者なり。

論者又宗教には千萬の種類あるを以て、之を採りて教育と併立せしむるの難を言ふ、然れども余は茲に宗教の種類を論ずるにあらず、宗教を一般に見做し、東西如何なる

宗教と雖、上に神を置き、人の善惡によりて未來に賞罰あるを説かば可なりとして論ずるものなり。

然らば則ち教育は是非宗教を要すべきものなるか、理論によれば或は之を否定するとを得べし、何となれば教育は人の身體を鍛練して之を強壯にするを得べく、知識を開して學藝を修めしむるを得べく、心志を涵養して道徳を行はしむるを得べき筈なればなり、然れども實際の問題に至る時は、教育は是非宗教の力を借らざるべからず、其故は何ぞや、蓋し身體を強壯にし、知るべき事を知り、行ふべき事を行ふ等、皆是れ人の義務に係るものなればなり、而して此義務を實際に行はしむる者は、獨り宗教あるのみ、論理上教育の力能く之を爲し得るが如きも、實際は首肯せざるなり、人をして教育を受くる時にも、教育を受けて後も、其竭すべき義務を完全に竭さしむるを得る所以は、宗教なる者が上に全知の神を置き、下には人靈を不死にし、其善惡に應じて未來に信賞必罰のある事を人心に注入して、人の一生を強く支配するが爲なり、「教育の基本は神の畏敬なり」と、聖言豈吾人を欺かんや。

然りと雖教育が是非宗教を要すと云ふ余の宿論は、或は世の教育家の自立心、否、切言せば、傲慢心に取りて頗る苦^{にが}かるべし、殊に理論上教育の力充分なるが如く理想せらるゝに、是非宗教の要を認めざるべからずと斷言せらるゝは、如何にも壓制的の斷言と思はれなん、然れども茲には人心の傲慢に合ふと合はざるとの論にあらず、實際宗教なくして完全なる人物の出來得るや否やの議論なり、余今教育の實際を目撃するに、宗教を基本とせる教育ありてすら、尙且子弟を薰陶して、一點誤なからしむるの困難なるを見る、况や宗教を放棄して之を度外に蔑視する教育をや、「余輩の教育主義は全く獨立的なり、毫も宗教臭味を帶ぶるなし」と云ふが如き語は、一見人の耳目を快にするが如くなれども、事實に於て完全無缺なる一人物をも養生する能はざるときは、其快や實に怪なりと謂はざるべからず、之に反して余の議論は或は卑屈的ならん、僧侶的ならん、宗教の臭氣紛々たらん、然れども余は人言に顧慮せず、唯だ其結果に於て完全なる人物を現出せしむる實力を重んずるものなり、耳目を快にし、人心を壯にする教育ありと雖、一箇の正直なる人間を作爲する能はずんば、亦何の益かあらん、

要する處は唯だ其成功如何に在るのみ。

論者或は云はん、何を以て宗教は斯の如く教育に必要なるか、教育を三分して德育とし、智育とし、躰育として論ずるも、宗教之に關するの要なきにわらずや、躰育の如きは無論宗教に關係なし、智育も亦然り、德育の如きも宗教なくして授けらるゝものなり云々と、余は先づ毫も宗教に關係なきが如く思はるゝ躰育に就て云はん、人の身体は勞働すべき時に勞働し、飲食すべき時に飲食し、起臥すべき時に臥起するときは、自然強壯健全になるべき道理なるが故に、此一方より見るときは、宗教の如きは毫も躰育に用なきが如く思はる、然れども靜かに他の一方より觀察するときは、人身の強健は必しも勞働、飲食、起臥の適度なるにのみ因らざるを見るなり、身の養生には一點怠りなきが如くなるも、往々疾病を惹起して身躰柔弱に赴くものあるは、吾人の屢々聞見する所なり、是れ果して何の爲ぞや、或は資質の虛弱なりしが爲と云ふを得べし、然れども其過半は素行の修らざるが爲にわらずして何ぞや、品行の良否は身躰の強弱に大關係ある而已ならず、智識の健不健にも、家庭の和不和にも密接の關係あり

るとは、余の喋々を待たざる所なり、時間の經濟の如きは余之を言はず、然らば則ち品行は躰育に取りては無論、智育にも、德育にも與つて大に力ありと謂はざるべからず、而して此品行は果して何によりて買ひ求めらるゝや、余は云ふ是れ宗教なりと、見るべし宗教の教育に須臾も離されざるとを、智育の如き、德育の如き必しも余の詳細なる議論を要せず、余は彼此の教育に就き一般に立言す、曰く智育を受け、德育を受くるは、是れ吾人々類の義務なり、身分によりて學び、人たるの品性に於て行を修むるは、是れ實に人の竭すべき義務なりと、而して此義務を立派に竭さしむる者は前文述ぶるが如く獨り宗教あるのみ。

論者或は教育を以て此義務を竭さしむるを得べしと云はんか、是れ教育を以て教育を行はしむる底の議論、余は一言以て之を破る、曰く教育は何を土臺にし、何を本尊にして此義務を竭さしめんとするかと、宗教を除くときは之が土臺本尊はなきなり、良し何物をか擧げて儀式的に之が土臺本尊とするあるも、其所謂土臺本尊なるものは毫も力なきものと知るべし、嗚呼斯る無力の本尊を故さら務めて宗教外に安置せんとす

るよりは、有力なる本尊を天に仰ぐ宗教を採用するは、豈勞少ふして功多き賢者の道にわらずや。

或る一部の論者は云ふ、學問を以てし、道理を以てして此義務を行はしむるを得、何となれば學問を以て道理を知り、道理を知つて是非善惡を識別するを得なければなりと、若し人間が本來完全無缺なる者にして、私慾の煩もなく、惡情の傾もなきものたらしめば、此論或は立たん、何となれば「知つて居る通り行ふを得なければなり」、然れども人間の真相を考ふるときは、知ると行ふとは大に異なるものあり、善を善とし、惡を惡とする、必しも難からず、然れども其善を行つて之を人にも行はしめ、惡を避けて之を人にも避けしむる、是れ實に困難にして六ヶ敷事なり、諺に曰く「能く言ふ者必しも能く行はず」と、聖經に曰く「善を善と見る、然れども惡を慕ふ」と、去れば人間の現状としては、畏敬する所なく、賞罰するものなく、唯だ知を是れ基として其義務を全ふするとは、到底不能の一事たるを免れざるなり、人若し之を疑はば、試に彼の道德の演説家を看よ、彼は道德の何物たるを巧に辯ず、然れども其辯する所

の百分の一をも躬ら行ふとを知らざるなり、彼は口を以て耳に教ゆることを得、然れども身を以て目に教ゆると能はず、所謂言論巧妙なれども、實行缺如たるなり、然れども記せよ、此問題に於ては、一の實行なくば百の喋々も畢竟徒勞に屬するものなるを、現今の事例は之を云ふを憚る、請ふ彼の羅馬の古代を看よ、シセロの代よりセチカの代に至る間は、同國に於て道德家の最も隆盛なる時代なりと稱す、然れども道德の最も敗壞せるも亦此時代なりと云ふ、「モット巧に言ふ能はず、然れどもモット耻しく行ふ能はず」とは、是れ同時代を評したる後人の適語なり、見るべし道德學の道德を行はしむるに不充分なることを、若し充分ならば、此道德學の隆々たる時代に、最も德行の君子彬々たるべかりしに、事實は全く之に反對せり、故に云ふ、學問のみならば道德を智育するを得、德育するとは得ずと、知らしむるを得れども、行はしむるを得ざるの謂なり、然れども天下國家の興廢存亡は知るに在らずして、行ふに在るを忘るべからず、再び同じ羅馬を看よ、彼は如何なる時代に亡びたるや、歴史は曰ふ、文物燦然として學術隆盛の絶頂に達せる時と、何の時に世界の覇となりて、歐亞の天下を一

統したるや、争ふべからざる事實は答へて曰ふ、學術未だ幼稚なれども、体力強大、農業隆盛、服務勤勉、而して信仰心、敵愾心の民心を通じて磅礴たりし時なりと、嗚呼羅瑪の興廢存亡は端なくも吾人をして國家を富強にするは、智育にわらずして德育にあり、德育を隆昌ならしむるは學問にわらずして信仰即ち宗教なりと云ふ確乎不拔の斷案を下さしむるものなり。

宗教の斯く德育に關するは抑も何の故ぞ、之れが説あるや、あり、夫れ知るは智識の一のみに係れり、然れども行ふは、知識のみならず、心志をも、支躰をも、所謂人間一匹の凡てを働かしむるものなり、而して斯く人間の凡てを働かしむるものは、天帝の存在、人靈の不死、及び死後の賞罰を金城鐵壁とせる宗教が、人間の一生を支配せるが爲にわらずして何ぞ、故に此宗教にして一たび教育に一致協力せんか、人をして知らしむると同時に、其知る所を必ず行はしむるが故に、茲に初めて智徳兼備の人物を現出せしむるを得るなり、是れ此人物、平居事なき時、或は事ありと雖其事や世の歡樂名利に關するが如き時には、容易に認むるを得ずと雖、一朝天下緩急の際に當

りて、逸樂富貴を棄て、父母妻子を遺し、一身を犠牲に供して働かんとする際に、初めて其功業偉勳は世に顯然たるに至るなり、是に於てか此人物を世の利害得失の上に立たしめたる宗教の力、初めて偉大なるを認めらるべし。

述べて茲に到れば、宗教は未來を説て民人を怖れしめ、其心志識見を狭少にする恐あるを以て、學問には一大障礙となるものと云ふが如き妄言は、自から散煥消滅に歸すべくと思はるれども、世には往々斯の如き言を爲して、宗教を教育に採用せざらんとを主張するものあるを以て、余は尙ほ茲に一言を附して之が妄なるを辯せんと欲す。

世人宗教を以て理由なく人に恐怖の念を起さしむる者と見做すは、大なる誤なり、恐怖すべき理由なくして恐怖するが如きは迷信の所爲、宗教の興り知る所にわらず、眞誠の宗教なるものは人を狭少ならしめざる而已ならず、寧ろ其智識を照らし、其膽力を強めて、膽識高壯の人物を作爲するものなり、何となれば學問の目的物は何ぞや、眞理なり、宗教は何ぞや、其眞理を信せしむるものあり、眞理を信せしむるは之を知らしむるに於て果して障礙となるや、請ふ先づ學問とは何物なるかを究めよ、偉大な

る人物は云ふ、學問とは造物主の思想を追想するとなりと、仰て天を觀よ、伏して地を察せよ、萬物の整然たる、孰れか造物主智能の跡を顯はさるものあらん、吾人其智能の跡を追求して、再び之を思考するは、即ち是れ眞誠の學問なり、知らずや世界は造物主の寛仁によりて蔭かれたる眞理なるを、此眞理を學ぶ、豈宗教上の信仰、感謝、觀念なくして可ならんや、古來の有名なる大學者を視よ、彼等は皆跪いて學びたる者なり、ニウトンの如きは神の名を耳にする毎に、帽を脱し、頭を低れ、肅然容を正ふして之を拜したりと云ふ、是等の大人物を以て、世界を器械的に講究し、些の感情もなく、冷々淡々に學問する唯物者に比する、豈日を同ふして語るべけんや、有神學者と無神學者とは、生物學者と死物學者ほどの差異あることを知れ、而して古來學問の創立者を以て、眞理の發見者を以て、後世より欽崇景仰せらるる者は、皆是れ有神學者にして、無神學者の中には、恐らくは一人も之をあらざるべし。

右は智識の一點に就て立言したるもの、今や事を行ふ點に就て考へよ、宗教は果して人心を狭小にするや否や、請ふ聞け、宗教は天の意に慚はざる罪惡のみを恐れしむ、苟も善なり、徳なり、功ならば、如何なる艱難危険をも恐れしめざるものなり、泰西に諺あり、曰く「我れ神を畏る、故に何事をも恐れず」と、古來驚天動地の事業を企て、空前絶後の勳功を樹てたる偉人は、往々皆「我れ神を畏る、故に萬事を恐れず」と云ふを得たる者なり、宗教にして恐れしむる所之ありと云はば、不義のみ、不正のみ、不道のみ、人若し之を恐れしむるを以て不可なりと云はば、余は之を人間として論せざるなり、若しそれ直道なる事、高尚なる事、寛大なる事に際せんか、永遠の天賞を掲げて氣節を獎勵し、萬事の恐怖を抜き取りて之が躬行に勇ならしむるものは宗教なり。

要するに眞誠なる宗教は、眞學と善行とを兩つながら併有せしむる一大有力のものなり、而して其目的と結果とは、人物をして大學者ほど道德者たらしむるに在り、夫れ道德衰へて國家盛なるはなく、宗教なくして道德進みたる例はなし、宗教の衰頹は道德の滅亡、道德の滅亡は國家の滅亡なり、然らば則ち天下國家を保つのは唯だ一つ、曰く宗教。

(七) 宗教以外の倫理學

論者曰く、近來歐米の倫理學者は、漸々基督教を離れて、別に倫理學を立てんとすと、是れ事實なり、然れども右等の學者が一たび倫理學の基礎を我基督教以外に求めんと欲して、神の存在、人靈の不死、及び未來の賞罰を排斥してより以て、奇々怪々の異論、異說想像されて、甲の論ずる所乙之を駁し、此れの是とする所彼れ之を非とし、論駁紛々、是非百出、其極遂に倫道なる者の存在をも否定する論者あるに及びたる事、是れ又争ふべからざる近代の事實なり、余は今茲に此重要なる一大問題を解説せんとするに當り、之を二條に區分し、第一條には神の存在、人靈の不死、未來の賞罰を基礎とせる古來の倫道如何を詳記し、第二條には宗教以外に倫道を立てんと欲せる近代學者の名説を論述せんと欲す、是れ蓋し宗教を基礎とせる倫道と宗教以外の倫道とを比較對照して、彼此の是非を讀者に判知し易からしめんが爲なり、余は固より前者の倫道を保持して、後者の倫道を排斥するものなれども、余の保持排斥する所の果して至當なるや否やを知らしめんが爲には、彼此倫道の記述最も公平の道なりと思考す

苟も正意誠心の士にして、虚心坦懐に彼此倫道の何物たるを講究せんと欲する者あらば、余の論駁を待たずして兩者の是非を識別せむ。

第一條 宗教を基礎とせる倫道

倫道果して有るや(第一段)、有らば如何なる者なるや(第二段)、既に斯々の者と定らば、如何にして之を知るを得るや(第三段)、余は性法によりて知らると云ふ、然らば其性法の基く所は如何(第四段)、第一段は倫道の存在、第二段は倫道の性質、第三段は倫道を知悉するの法、第四段は倫道の基礎、是れ即ち余が宗教を基礎とせる倫道に就て詳記せんと欲する順序なり。

(第一段)倫道の存在 倫道なる者は果して有るべきものなるや否や、是れ吾人の第一着に講究せざるべからざる問題なり、何となれば若し倫道を元來無きものとする時は、之に關する凡百の議論は、畢竟無用の長談に屬すればなり、余は固より倫道の存在を認む、而して之が存在を認むる所以は、事實と理論に於て確乎不拔の答あるが爲なり。

事實 東西如何なる人民を視るも、人として善惡の區別を識認せざる者は未だ曾て之れあらざるなり、又苟も人間と云ふ動物を以て成立せる社會ならば、如何なる社會と雖皆此善惡の區別によりて治まり居らざるものはあらじ、文明社會固より然り、野蠻國民に至りても亦皆此の如くならざるはなし、クワートルフ・ジュ氏曰く「開明の國にも惡の跡ありて、吾人を悲憤の涙に咽ばしめ、未開の國にても善の點ありて、吾人をして感歎措く能はざらしむ、蓋し如何ある野蠻蒙昧の國民と雖、人道を知らざる者はなし、寧ろ彼等は事によりて善の道を極めて高尚に竭したるを認むるなり云々」と、然り、善惡は國の文野に係らず、何處にも識別せられ、又何處にも同じく行はれたるものなれば、倫道の存在は争ふべからざる事實として見る可し、吾人は彼の海賊野盜の社會を視るも、尙ほ且つ善惡の識別の存するを認む、何となれば彼等は相共に力を合せて他人の財貨を掠奪すと雖、相互の間には一物たりとも之を盜むを嚴禁すといへばなり。

然り而して此善惡の識別は利害に係らず、苦樂に拘らずして、倫道を行はんとを嚴命す、若し其命に従はざるときは、毫も假借する所なし、一惡一罪必ず之が應報を食ましむ、設令罪惡を人知れざる處に行ふと雖、本心より痛く之を刺激して、其非を責罰せざるはなし、天に逃れ、地に隠るゝも、其責罰は免るゝ能はず、詩人の所謂馬に鞭して奔馳するも、其責罰は始終附隨し行くものなり、然らば則ち善惡の思想は堅く吾人の腦裏に印刻せられ、倫道の緣由は深く人心の極底に樹立せられたりと謂ふべし、是れ此事實如何なる人民に就きて見るも、必ず其徴あり、故に余は此事實によりて倫道の存在を證認す。

理論 今又事實より一轉して理論の裁斷を仰がんに、亦倫道の必ず無かる可からざるを見る、何となれば天下の人々何れも皆己れの自由を以て、己れの行爲を左右し居るを知了す、然れども此の自由の在るは乃ち是れ倫道の在るを意味するものなり、蓋し倫道とは此自由を制裁する所の法なり、若し世に此自由を制裁するの法なからんか、天下の人々相互に殘逆を逞ふして、世は遂に壓制と奴隸との天地に成り了らんのみ。又己れ一身に取りても、若し此自由を制裁する法なくんば、人々は放逸邪肆到らざる

所なけん、然らば則ち倫道なきときは、嘗に人の人たる道を竭すこと能はざる而已ならず、社會亦一日も成立するを得ざるなり。

(第二段)倫道の性質 換言以て之を云へば、倫道は如何なる者と云ふ事はなり、倫道は多くの義務を含蓄す、義務は神法或は人法より出づ、神法と人法に二種の區別あり、曰く性法、曰く法律是なり、法律は時勢場合等によりて變更なきを保せず、故に法律より出づる義務は亦隨て變更するを知る、性法は如何、區別して論せざるべからず、蓋し永久不變のものもあり、又法律の如く時宜により變易するものもあればなり、永久不變の性法は人の本性に銘刻せられて物の性質に附隨す、故に人の本性の變らざる限りは、其法も亦決して變更する期なし、是れ之を性法の原理プリンシプルと謂ふ、例せば不善を爲し、無道を行ふは不可なりと云ふが如き類是なり、時宜によりて變更する性法とは何ぞ、人の本性物の性質は永久不變なるものと雖、兩者の關係は時宜によりて變更するなきを保せず、例せば人を殺すは不可なり、然れども戰時に之を殺すは罪とならざるのみならず返て賞あり、何となれば平時に於ける人と人との關係は、戰時に

於て人と敵との關係となるが故なり、或は又人を助くるは善事なり、然れども人の竊取を助くるは不可なり、蓋し彼と此とは時際異なればなり、此の時際に應じて變更する者を稱して性法の分理セコンダリカムとは謂ふなり、此分理は時勢に應じ、場合に際して、性法の原理を一一應用して、一般の道理の實際に施行せらるるものなり、而して世の法律なる者は、性法の原理及び其分理を一層詳細に實施適用するものなるを以て、其禁令は一事一物の細微にまで立入るものとす、右の區別を見るときは、原理なる性法より出る義務は決して變更するなく、唯だ其分理の性法より出る義務のみ變更するを知るべし、而して倫道なる者は、前記せるが如く、此等の義務を規定する道なり、故に義務は其出る所の法によりて時に或は變更すと雖、此義務を規定して吾人に行はしむる倫道は、吾人の好惡、諾否、及び便不便等によりて決して變換する者にはあらざるを見るなり、勿論倫道と雖吾人を強ひて必ず義務を行はしむとは云ふ可からず、蓋し人は禽獸と異なればなり、禽獸は自由なきを以て、知らず識らず天然の傾向に従て動く雖、人は自由あるを以て、知得したる上其行動を左右す、故に倫道の規定する義務を

守るとを得れば、又之を守らざることを得、然れども守ると守らざるを得る自由ありて、初めて善あり悪あるを知る、即ち義務を守らざることを得て之を守るは善、義務を守るべくして之を守らざれば悪となる、既に善あり悪あらば、随つて功あり罪あるを知るなり、何となれば功罪の善惡に於けるは、猶は影の形に於けるが如く、響の音に於けるが如き者なればなり、然れども功と罪とは、全く正反對なる者、故に其歸する處も亦随つて異ならざるべからず、然り異なり、功の歸する所は賞、罪の歸する所は罰、是れ理の必致、義の當然なり、然らば則ち倫道なる者には是非賞罰なかるべからざるを知るべし、要するに倫道は義務の規定、義務を行ふと否やは自由に係る、自由あるによつて善惡功罪出づ、善惡功罪あるによつて賞罰之を待つ、故に倫道を定義せば、賞罰を掲げて、善惡功罪其何れを擇ぶも自由なる人間に、其竭すべき義務を規定する道と謂ふべし、(而して其竭すべき義務は神法、人法より出づる事、既に前文に記したる如し)。

人或は云はん、野蠻未開の人民は往々吾人の善と見做す所を不善と見做し、不善と見做す所を善と見做すと、答て曰ふ、性法の分理に就て然るも、原理に就ては決して誤るとなしと、蓋し分理なるものは原理の應用にして、時際によりて種々様々に推理せらるればなり、語を換へて之を言は、彼等の誤るは原理の應用餘りに細密に過ぎて、一見可否を知る能はざる時、若しくは兩方に理由ありて容易に之を識別すべからざる時に限るものなり、然れども其心に於ては初めより誤るとおし、例へば野蠻國民の習俗として老朽の父母を殺すを以て孝道と爲すが如き、其事誤れども、其心は孝道に在るを以て、一概に罪すべきにあらず、若し彼等にして父母を殺すの所爲の惡なるを知了せんか、忽ち之を改めん、去れば彼等の誤は外部の所爲にありて、内部の所爲にあらず、若し其知一步を進めば、亦吾等と善惡の見解を同ふせん、故に彼等一時の誤認は毫も善惡其物の性質に變更を來さざるあり。

或は又云ふ、賞罰の爲め倫道の規定する義務を行ふは、心事卑賤ならずやと、然り、浮世一時の賞罰を目的とするは、其心事卑と云ふ可し、若し夫れ倫道に適合せる永遠の賞罰ならば然らず、何となれば道理によりて善と惡とは自然其異なる點に歸せざる

べからざればなり、然らば即ち其歸點を目的として善を行ひ惡を避くるは、合理的の心事と云つて可なり、加旃ならず人は何事を行ふに當りても、自己を忘るゝとは得ざる者、天性の然らしむる所必らず自己に幸福を求めんとを要す、然れども其幸福は理の外に之を認むる能はず、されば理によりて自己の幸福を目指すは、是又義の當然にあらずや。

(第二段)倫道を知悉する法 余は前段に於て倫道は義務の規定にして、義務は法律若しくは性法より緣由し來るとを云へり、故に其法律と性法とを知るは、乃ち是れ倫道を知るなり、余は成るべく簡單に之を云はんとす、曰く

法律ならば神の啓示又は立法者の布告によりて知られ、性法ならば人々個々の良心によりて知らる、故に古人も「良心は性法の布告者」なりと云へり、蓋し一片の良心を以て事物を観察するに、先づ其事物の性質關係等を知るを得、次に斯る性質斯る關係ある以上は、斯々の義務なかるべからずと推理するを得ればなり、例へば今父と子とを視ば、其性質關係によりて、相互に恩愛の義務なかるべからざるを見る如き是な

り、其他五倫も亦皆斯の如く推知するを得、然り而して倫道は斯の如く吾人一個の知恵分別によりて之を知るを得ると雖、尙ほ之を明かに知らんと欲するときは、自己の力の外、亦他の力をも假らざるべからず、否らざれば其所謂倫道なる者は甚だ幼稚にして、倫道の初歩たるに過ぎざるなり、是に於て乎教育、師範、宗教、默啓等の必要を見る。

(第四段)倫道の基礎 倫道は前記の如く或は自力、或は他力によりて知了せらる。

然れども我れも他人も倫道を作爲すとは謂ふべからず、知ると作るとは大なる區別あり、他人ならば之を教へて傳ふる而已、我れならば之を辨へて授かる而已、而して其傳授せらるゝ倫道は超然彼我の外に存す、彼我の外何處に存するやと云へば、事物の本有^{エッセンス}に存す、即ち事物あれば必ず其關係あり、關係あれば其關係によりて斯々せざるべからずと云ふ理、云々せざるべからずと云ふ道自ら打算せらる、是れ此の理と道は即ち是れ吾人の稱して倫理と云ひ、倫道と云ふものなり、而して其事物の關係、隨つて其關係より出る道理は、先づ初め何者に認められたるやと云ふに、森羅萬象を造出

したる造物主の知能に認められたりと云はざるべからず、何となれば造物主が事物を造出せんと理想するに當りてや、其造出せらるべき事物の性質、關係、及び其道理をも相共に聯想したればなり、是に於て乎永遠の法なる者出づ、造物主の知能の中に在る永久不變の天理即是なり、勿論造物主の事物を造出せんとする當時には、現存の事物と異なるものを任意に造出するを得たり、随つて又其事物に應じ、現存の者と異なる關係と道理とを任意に定むるを得たるは論なし、然りと雖既に今の如き事物を造出し、又今の如き關係道理を一定し置きたる以上は、最早や現存の關係道理と異なる者を他に設定するを得ざるものとす、是故に造物主と雖今の事物を變更せざる限りは、倫道の原理は得て渝ふ能はざるなり、是れ此永遠の法、後に吾人々類の性に分賦せられて性法となる、即ち是れ造物主の腦裏に在る永久不變の法が、直に吾人々類の腦裏に植付られたる者なり、尙ほ換言せば、吾人に共通せられたる永遠の法は、直に是れ性法なりと謂ふべし、故に吾人は愈々之を知得するに従て、愈々高蹈して造物主に接近するを得る者なり。

述べて茲に到れば、性法は何故吾人に義務的命令を爲すものなるや、明かに知るとを得、何となれば永遠不變の天理上に在りて、吾人々類の良心に理否善惡を規定して、明かに之を識別せしむるが故に、吾人は是非此識別によりて自己の行爲を脩め行かざるべからざればなり、人性に知らされたる永遠の法は、理否善惡を知らざる爲するを許さず、故に吾人は彼を守り、此を避くる義務を免れんとするも能はじ、永遠の法を變更するは人の權内にわらず、否、造物主の權内にもわらず、故に吾人は自由あるによつて、之に背反するとは得べし、然れども之に服従せざるべからずと云ふ義務は、吾人の性質にも附隨するが故に、性質を變更せざる以上は、此義務をも如何ともする能はず、若し我は天より自由を得たり、此義務を守らじと云はんか、人性の底より道理によりて罰之を待つなり、所謂良心の責罰は免かるゝ能はざるものと知るべし、加之ならず、倫道の究極する所に至りても、賞と罰との必ず無かるべからざるの理は、各自の心底にも、萬民の正意にも、且や萬邦萬代の歴史、政治、習慣にも證據歴々たり、畧して云はば、倫道何れに基くかと云ふに、正しく宗教の大本たる二大原理、即

ち造物主(神)の存在と、靈性(人靈)の不朽即是なり。

第二條 宗教を脱離したる倫道

余は第一條に於て宗教を基礎とせる古來の倫道(即ち吾人が古今東西の正意誠心の人士と共に遵守する倫道)に就て、一々其真相を詳述したり、明ある讀者は必ず之が公平なる裁判をなさんと思考す、今や余は歩を轉じて宗教以外の倫道(語を切にして云へば、倫道の基礎を宗教以外に置かんとせる近代の學者の説)に就て、其梗概を畧記し、并せて之に余の意見をも陳述せんと欲す、蓋し余は近代學者の唱道する倫理學には、全然反對の意見を懷抱する者なればなり。

宗教を離れて倫道を立てんとせる近代の學者は、其基礎を何れに置かんとするや、請ふ近代の尤も高名なる學者をして語らしめよ。

(第一)ベンザム曰く 善とは利益若しくは歡樂を來す者の謂なり、利益は歡樂を求むる手段、歡樂は利益の達する目的なりと、又曰く、天下の人々は皆同性同質なるを以て、一人の樂は通じて衆人の樂となる、隨つて一人の身に最大の福樂となる者は、

衆人にも亦最大の福樂となると、(是れ氏が豫め利己主義の攻撃を避けんが爲め、斯くは立論せるものと知らる)、故に氏の説に據れば、善業とは何かと云ふに、最大なる福樂に到達すべき事業の謂にして、失敗せば失敗したるだけ其れだけ其善闕如したるものと云はる、氏は何物か最も大なる福樂となるかを知らしめんが爲に、千福萬樂を數學的に價して、一の目錄の如きものを案出せり、即是れ新奇なる倫道の字典なり。

余の見を以てせば、福樂を斯の如く衡量するとは能はずと思考す、何となれば類の異なる福樂は、同一の權衡を以て量るとを得ざればなり、例へば智識の樂と飲酒の樂との如きは、全く異類のものなれば、他に之が標準となるものなきときは、如何にして兩者の價を定むるを得るや(其一)。又一人の樂は衆人の樂となるとは、甚だ奇怪の説なり、吾人は寧ろ一人の樂は、往々天下公衆の害となるの事實を驗す、又設令害とならずとするも、樂其物を基礎とせる氏の倫理によるときは、他人其樂を見て之を媢嫉するや必せり、若し夫れ之に反して他人の樂をも自己の樂の如く思ふ者あらば、嗚呼是れ大量なる人物の心事、決して這般の倫理を守る人の事にはあらざるなり(其二)。

加旃ならず、吾人日々の經驗を以て見るに、義務は利益又は歡樂とは思はれざるなり、勿論義務を竭すにも一種の樂あれども、此樂は義務を竭したる後に出で来るものにして、義務とは全く異なるものたるを知らざるべからず、人若し之を疑はば、省みて良心に問へ、義務を竭さざる時は、良心之を許さざるも、利益歡樂に至りては之を望むも望まざるも、良心は黙々たるにわらずや、或は若し聲ありとせば、是れ其利益歡樂が義務に反對する時に限るなり、吾人は屢々之を感ず、蓋し利益と歡樂は屢々義務と合はざればなり(其三)。古來の正直なる道理によりて見るときは、余の嘗て論じたるが如く、人の目的に三あり、曰く利益、曰く歡樂、曰く善徳、原語にては皆之を「樂」の一字を以て通稱すれども、三者全く相異なるものにて、利益と云ひ、歡樂と云ひ、決して善徳とは謂ふを得ざるなり、故に若し此三者を區別せずして同一視する倫理あらば、是れ道理に合はざる倫理と謂はざるべからず、故に余は云ふ、宗教以外の倫理は乃ち是れ道理以外の倫理なりと。

(第二) ストアール、ミルは曰ふ

道徳は吾人の經驗より胚胎し來れり、蓋し他人の利

となる事は我の利となり、我の害となる事は他人の害となると、吾人驗して之を知る、隨て吾人一個の爲を計るも、事凡て他人の爲をも計るに相當す、且他人の爲を計らざるときは、社會より罰あるが故に、勢ひ自身一個の利益を目的として、天下公衆の利益をも計るに至る、例せば租税を納め、戦争に出づる等、是皆社會の組織制裁によりて之を爲せども、畢竟は皆自他の幸福に歸する類の如し、加之ならず、日常の經驗によりて、個人としても、公衆としても、其幸福は常に善徳と稱する者に附隨す、是を以て人は己れの幸福と他人の幸福の爲め、善徳を行ふに至るなり、(勿論氏は善徳と云はず、經驗より來る結果と云ふ)、然らば則ち人の行ふ倫道の終焉の目的は、天下公衆の幸福を計るに在り云々と。

余の意見　人が事を行ふに當り、己れの利を計るが故に、人の利をも計るに至るとは偽(愛國忠君の事業を除くの外)、何となれば人は往々己れの爲をのみ計るが故に、他人の上にも不利を來すと云ふ事は、吾人の日々目撃する所なればなり、勿論人々皆善を行ふて正道を守るとせば、事或は他人の幸福ともなるべし、然れども人の善を行ふ

て自らを正ふするは、他人の幸福の爲にするにはあらずして、義なるが故に之を爲すなり、吾人が屢々艱難を忍び、損害を甘んじても正道善事を行はんとするは、是れ其明證なり、故に天下公衆の幸福を計らんとする者は、須らく先づ己れ一個の利害を忘れざるべからざるは、今日の情態にあらずや、然り、己れの利益を目的として天下の公益を計らんと云ふが如きは、公益を私利に供し、天下を一人に使役せんと欲する者に限るなり(其一)。善徳は幸福に附随すと云へども、毎時幸福のみを目的として、善徳を行ふとは云ふ可らず(其二)。人若し事の善か悪かを確めんとする時は、公衆の幸福に合ふや否やを考へずして、寧ろ各自一片の良心に問ふことを知らざるべからず(其三)。又一の善事を行はんと決心するとき、自己の利害をも斟酌せざるにはあらずれども、往々は内心の勸告によりて、利害の觀念なく、自由に之を行ふと云ふ事、是亦知悉し置かざるべからず、是を以て之を觀察せば、吾人の行爲の定規は外部の原因にはあらずして、内部の良心に在るを知るなり(其四)。善惡の制裁(賞罰)は社會にのみ在りと謂ふべからず、社會に知れて其賞罰を受くる事業は、一二數ふ可し、社會の制裁に係らざる事業行爲にして、而も罰すべく罪すべき者枚擧に遑あらず、是等は社會の耳目には知れず、然れども倫道の決して許さざる所、又決して許す能はざる所なるを忘るべからず(其五)。余は之に由りて斷言す、倫道の基礎を公益に立てんとするは、立つるにあらずして却つて之を倒すに當ると。

(第三)スベンサーの説　奇言を吐く氏は、奇なる主義より出發して、奇なる結論に達したり、曰く進化は世界の一大法則なり、吾人々類も亦此法則によりて漸次進化し來れり、進化し來りつゝ感情習慣等を作りて、之を父子の道を以て傳授するに至れり、故に今人の有せる思想風俗の如き、亦皆父子相傳の道を以て進化しつゝ來りたるものなりと(右は進化論の骨髄)。氏の主義によりての倫道は如何、曰く人の事業は己れの必要と歡樂に由來す、人は生きさんが爲め、樂まんが爲に働く(生存競争の語、人皆之を知る)、然れども己れと他人とは同類なるが故に、己れの利益の爲に働く事も、他人の爲に働く事となる、故に事は利己主義に始まりて、自他比較の上遂に利他主義となる、例せば病人を懇切に療養するは、自身も疾病に罹りて、他人の看護を受くる時

あるを知らばなり、他人の権利を認めて之に服するは、己れの権利を他人に認めしめて、之に従はしめんが爲なりと云ふの類是あり、故に氏の説に據るときは、倫道の最高點は、個人と公衆の最大幸福を維持する法を立て、此法を完全に遵奉するに在り、是れ實に人間進化の極點なりとす。

余の意見　進化の説は別問題に屬す、余復た茲に之を論ずるの要を見ず、以爲らく今より百年を經過せば、人々氏の進化論を聞いて哄然大笑すべし、單だ氏の倫道に就きて聊か卑見を陳せん、人々の中に父子の道を以て遺傳し來るものあるは、余も首肯す、善習惡僻、氣風氣質等往々父より其子に相傳はるを見るなり、然れども先づ學問の如きは決して斯の如く傳らず、蓋し學問は社會共通の公實なるが故に、社會公共の道即ち教育を以て傳授せらるゝとを聞く、父子生出の道を以て遺傳せらるゝとは未だ會つて聞かず、人の人たるべき性質の如きは、猶更然り、人智の發達進歩するとは之を聞く、人間の性質の進歩は、吾人未だ會て聞見したる例なし、今も古も人間は人間なり、善惡の思想、識別の如きは、全く利己利他の外なる道理と云へる者に在るものにして、

六千年の太古より今日に至る迄、依然同一なり、勿論天下の事業の多くは、往々必要の爲め、福樂の爲に行はれ居るは事實なり、然れども何の爲に行はれ居ると雖、其行の善惡に至りては、義を義とし、不義を不義とする永久不變の大法によりて分かるゝとを知らざるべからず、而して此れ全く必要と歡樂との外なり。自他比較の道は、場合によりて人の行を左右せる方法となるべし、何となれば他人を己れに比して考ふるときは、斯々に爲し、云々に行はんと思ふ心起るものなればなり、又己れの権利を守らしめん爲め、他人に竭すべき義務を守ると、是又必無の事にあらず、然れども如何なる権利を守らしむべきや、又如何なる義務を竭すべきやと云ふが如きは、決して自他比較の道の規定する所にあらざるなり、此れは善、彼れは惡、此れは義、彼れは不義と云ふが如きは、果して何の標準によりて規定すべき、自他の幸福なりと云はんか、其所謂幸福とは如何なる者を指すや、何となれば幸福には種々あればなり、若し利益歡樂より出る幸福と云は、是れ倫理學にはあらずして、利益學ならん、歡樂學ならん、余は今日まで倫理學とは善道の學にして、利益歡樂の學にはあらずと思惟し

たり。究極氏の倫道によらば、人々は遂に如何の結果に達すべき、余は不幸にして未だ人間進化の極點を見ざるが故に、定かに之を知るを得ざれども、古今の事跡を以て之を考ふるに、今日まで利益歡樂を以て主義とせる人々は（即ち未來の賞罰によらずして、單だ己れ一個の利不利をのみ考へたる人々は）、如何なる譯にや、未だスペイン氏の萬民幸福の理想には遠く遠く實に遠く企及せざるを目撃する而已ならず、寧ろ他に之を制止する者なきときは、世界の風紀倫道を頹敗し去らんとするの傾向あるを見るなり、余は恐る、若し此説によりて人々進化し行かば、早晚人間は獐惡なる猛獸の如くなりて、暴逆濫行到らざる所なきに至らんとを、然らば即ち氏の進化的倫道の極度は、人をして獐惡なる怪獸に化するに在りと謂はざるべからず、余の此言は決して矯激の言にあらじ、此事は既にスペイン氏の以前に在りて經驗せられたる所なり、距今二千二百年前希臘にエピクールなる哲學者ありたり、氏の説に曰く「吾人の幸福は苦惱と悲憂を避くるに在り、義は利益に基く假定なり、國民に取りて義不義等の事なきは、猶ほ禽獸に取りて之なきが如し、唯だ禽獸は相互に平和を守るの契約を

爲す能はず、人間と異なるは是れのみ云々と、其後羅馬に於てセネカと云ふ哲學者ありたり、劇場に出で公然揚言して曰く「死して後は萬事休す、死其物も亦是れ虚無なり云々と、當時の人民は拍手喝采を以て右二氏の説を歓迎したり、然れども人民が一たび斯る主義を歓迎するや、忽ち相當の結果を食みぬ、如何なる結果を食みたる、言はずして知る、滅亡の結果是なり、義不義理不理の原義を取除きて、利益安樂をのみ實物とせしより、希臘羅馬の國家は妙に進化したり、如何なる進化ぞ、曰く二國は亡びたり、今日に至るも道理は變せず、原因同じければ結果も亦同じかるべきなり、希臘羅馬の滅亡は余をしてスペイン氏の進化説の行はる、邦國の滅亡を豫想せしめて、毛髮悚然たらしむ、古は有名なるプラトン、エピクール派の學者を排斥して曰く「爾等退けよ、我等は一大事業を有す、個人の心底にも全世界の局面にも神法と善道とを注入せんとする者なり、我れ爾等が公然市場に出で、我等の妻子の風俗を頹敗せしむるを傍觀する能はず云々と、余不敏と雖今日のエピクールを排斥せんが爲め、亦將に此プラトンの語を以てせんと欲する者なり。

(第四) 獨立倫道なる者あり、宗教にも關せず、唯物主義にも係らず、人性の如何を實驗したる上案出せられたる倫道なり、換言せば、人間其物を取り來りて、如何なるものなるやを實驗したる上、其實驗に基て設定せられたる倫道にして、要は人間と云ふ者は、理非善惡の分別、良心、自由等を備ふる者なるが故に、苟も人間的の行動あらんを欲する時は、是非とも右の性質に適合して行はざるべからずと云ふに在り、稱して之を「人の人たるべき者の倫道」と云ふ。

余の意見　是れ此倫道は文明國に在りて頗る儀正しく、行善なる表面的の君子を出だし、人の人たるべき面目を維持せしむるが爲め、往々不義、不實、不信等の行を避けしめたる功ありたる事は、余も決して之を没せざれども、此倫道の淺薄皮相の主義に屬する事に就ては、一言茲に之を辯明せざるべからず。

余は問ふ、善惡の區別は何に基くか、何故に惡を避け善を行ふは人間の美事なるやと、獨立倫道の學者は曰く、人の性質斯く言へばなりと、蓋し惡は人間の資格に合はず、善は人物の面目に係るを以てなりと、然れども余は問ふ、人性の中には道德の善法に

反背して、日夜德行を攪亂せんとする厄介なる一の邪魔物あり、そを何とか爲す、私欲即是なり、然らば則ち人の性質に従つて行ふと云ふも、其意味兩端に分かる、善性に從て行ふの意か、將た惡性に從て行ふの義か、若し善性の要求によりて行ふと云は、惡性の之に反する絶叫を制止するに何物を以てする乎、嗚呼此倫道や富貴逸樂なる人に取りては美なるべくも、貧困不滿の人に取りては、到底守る能はざる者なり、又之を守らざるも、之を賞罰する者なければ、誠に力なき倫道と謂はざるべからず。吾人の實驗によるときは、天下の民人中には、富貴逸樂の人よりは、貧困不滿の人民其多數を占め、又人々の事を行ふ際には、私慾往々良心に勝つの事實を見る、今茲に天の應報を説き、未來の賞罰を掲ぐるも、尙は且つ人心を満足せしめ、私欲を抑壓せしむるの難きを覺ゆ、然らば則ち人間の性質其物の外、倫道の基礎を他に有せずして、賞もなく、罰もなくんば、果して何を以て天下民人の多數を治むることを得るや、持む所は唯だ腕力のみ、然れども腕力なる者は天下を治むる道にあらざるのみならず、往々彼等不滿なる多數の暴民にのみ在るを見れば、獨立倫道によりて世道人心を維持する

の如何に困難なるかを知らるゝなり、然り、這般の倫道によりては世の中の立つべき理はあらず。

論じ去り論じ來りて茲に到れば、天下の人々が猶一步進化し行かざれば、宗教の大本たる神と靈魂と賞罰の外には、倫道を据付くる土臺はなきなり、嗚呼「神と靈魂と賞罰」を大本とせる宗教を離れて、他に適合なる、恰好なる、而して又有力なる倫道の基礎を發見する程進歩するを得るは果して其れ何れの日あるや。

(第八) 基督公教と近代の學問

世の學者往々語て曰く、近來學問の進歩するに従つて基督教は漸次衰頹の途に赴くと。

此事種々に解説せらるゝを得、故に之れが答辯も亦種々あるなり。

(第一) 若し近代の學問が日に月に進歩するに伴はれて、農工商の業益々吾人に富と財と樂とを買得る手段を多からしめたるが故に、天下の人々は皆利益を得ると福樂を求むるとの二事にのみ偏重して、宗教道德の如きは、往々之を放棄して顧みず、甚敷

にいたりては父兄が其子弟を教育するにも善徳の道を教へんよりは、身代を作るの道を教ゆるに熱心するに至りたるが爲め、自然我基督教を研究する者は古よりも淺くして且つ鮮く、之を信奉する者も古よりは軽くして且つ鈍くなるに至りたりとの意なりとせんか、余は實に是れを事實なりと首肯す、不幸にして之れを事實なりと首肯せざるを得ざるなり、然れども此事實は我基督教の眞偽に於て何があらん、唯だ是れ人間の念と働きが宗教と道德を離れて、他の一方に傾きたるなりと云ふに外ならず、此傾きは天下の爲め國家の爲めに慶賀すべき美事なるや否やに至つては、今後の經驗は之に答ふる所あるべし、若し夫れ過去の事跡を語らんか、古來形而下の進歩が形而上の進歩と随伴せずして、一方にのみ偏するときは、嘗に宗教のみならず、風俗も道德も相共に衰頹し、風俗道德の衰頹と共に一國の精神、人民の氣力も消亡に歸し去りたるは争ふ可らざる事實なりとす、東西の歴史を繙いて古今の成敗を勘考するに、今日まで有力盛大の邦國の滅亡したるもの、皆是れ有形的進歩の極にして、宗教道德の頹敗したる所以にあらざるはなし。

(第二) 若し又未熟の學者の事ならば、即ち昨今漸く學問界に顔出したるが爲め、見るもの聞くもの一として高尚珍奇ならざるはなく、宛も幼年學生の如き經驗なき正直餘りの心から、己れの學び得たる所を己れ自から發明したるが如く思考し、自から眼を開く迄は天下の人々何事も知らざりし如くに心得、此世界は己れが初めて世の中に立出でたる時開けたるが如く想像し、斯の如く世を觀するを以て己れ一個の才學智識のみを感心して、太古より父祖等の信奉し來りたる教義杯を餘程陳腐になりたるなりと思ひ、己れの學問に溺れて、宗教の如きものを信奉するの謙遜と正直とを失ふに及びたりとの意味なりとせんか、是も亦事實なり、何となれば斯る自惚學者の心に於ては、學問の水平昇高するに従つて、宗教の水平は低下するものなればなり、然れども斯る自稱學者と雖若干歩を進めて學問を爲し、人智の達する所まで到り、人力の及ぶ所まで行きて、學問の眞境に達するを得るならば、其學問の眞境に於て必ず宗教に撞見し「嗚呼宗教界も思つたよりは高遠なるものなり」と初めて絶叫し、多くの好敵手を其中に見るに至るは必定なり、蓋しヘーコンの言の如く「學識淺少なるときは神と

離れ、高遠なるときは之に近く」ものなればなり、今又事の實際を點檢するに、古より大學者と稱せられ、今代科學の鼻祖とも欽崇せらるゝ者の中には、無教無神なる學者一人をも擧ぐるとを得ざるなり、彼のコペルニク、デスカルト、パスカル、ニウトン、ケブレ、セッキ、ルウエリエ、及び今日のフアイエ、バストール等の碩學鴻儒は皆跪て神に學びたる學者なり、無神論者、唯物學者の中にも種々の博識者は許多あらん、然れども彼等の學問には識見の大と理想の美とは欽如するものなり、何となれば其眼と其思は物質の上に超越する能はざればなり、又斯く物質にのみ沈没して、學問を高崇ならしむる神と靈との思想を除去するときは、生氣窒息して人の心志は到底伸ぶるの理なきものなり、人間の學問は決して物質のみに限るものにはあらず、人心の志望は決して茲に満足せず、知らずや人心の志望は「我は是より大なる者、又是より大なるもの、爲に生れたる者」(Major sum, ad majora natum)と絶叫し居るを、余をして多言せしむる勿れ、要する處は未熟學者に於ては、學問の水平上るに従つて宗教の水平下り、眞誠なる學者に於ては、全く之に反し、其學問進むに従つて信仰鞏固となると云

ふに在るなり。

(第三) 若し又論者の意、近代の學問進歩するに伴はれて、往々宗教の誤謬妄戾を摘發公示するが故に、今日まで信奉せられたる基督教は自身を持切れなくして、漸次衰頹の途に赴くとの事に在らば、論者は性質の全く相異なる二事を同一視して立論すと謂はざる可からず、二事とは何ぞや、即ち宗教と迷信と是なり、論者の言ふ所は迷信に在り、宗教にはあらざるなり、然れども迷信と宗教(我基督教)とは天淵を隔たざるの相違あるを知らざる可らず、夫れ迷信とは人々が道理なく、又道理以外に信奉遵守する事を謂ふ、迷信とは何れの國、何れの代にも之あるに相違なければども、元來道理なき空を寂々の信仰なるが故に、人智開發して事を實際に研究するに従つて、燈火の日光の前に其光を失するが如く、自から其跡を絶つに至るものなり、宗教は然らず、我基督教の如き決して迷信にはあらず、彼れは燈火にあらずして日光其物なり、彼れは道義と真理を以て世に立つ者にして、如何なる學問の光に照らさるゝも消失する憂は毫も之なし、彼れが神によりて創立せられたる神異の事業たるは、萬國の歴史

中最も較明顯著なる一大事實として語らる、彼れが吾人に信せしめんとして掲出せる教理は、人知の及ぶ點に於て道理と同一なるを知らる、及ばざる點に至りても眞誠の學問とは毫も背反せざるを見る、何となれば眞誠なる學問の大元は乃ち是れ眞誠なる宗教の大元にして、彼れと此れとは均しく同一なる造物主を大元として仰ぐものなればなり、同一なる大元ならば一方に學問と云ふ眞理を立てながら、他の一方に之に正反對なる基督教なる宗教を立つるの理由はあらず、又實際に就て考ふるも、今日まで眞誠なる學問によりて發揮闡明せられたる事物は一として我基督教の眞理の證據とならざるはなし、然らば則ち近代の學問の進歩は實に我基督教の衰頹を來さざる而已ならず、却つて之に一段の光輝を添へて兩々相顯立し行くと謂はざる可からず。

(第四) 若し又我基督教に正反對なる學問ありて、氷炭相容れず、彼此相敵し、所謂不俱戴天の仇讐にして、後者が世界に傳播するに従つて、前者愈々其領土を縮蹙せらると云ふあらば、是れ實に解釋を要する所、輕々に看過すべきものにあらず。

余は先づ問はん、斯の如き學問は果して如何なる學問ぞと、蓋し天文學にもあらざる

べく、地質學にもあらざるべく、物理學にもあらざるべく、生理學にもあらざるべく、動物學にも、植物學にも、礦物學にもあらざるべし、何となれば礦物から人間まで、天の奥から地の底までを深究遠捜する凡百の學問ありても、若し存在する事物を有りの儘に研究する眞誠の實學ならば、一として我基督公教に背反するものにあらざればなり、我基督公教の教理と直接關係なき學問は之あらん、然れども關係なきは背反するにあらざるなり、若し夫れ關係を有する學問ならんか、余が前段に記したる如く、皆我基督公教の眞理を保證する良友たるなり、然らば究極如何なる學問となす。嗚呼我れ之を知る、唯物學是なり、是れ實に我基督公教とは不俱戴天の仇敵なり、彼れ倒れざれば必ず此れ倒さる可し、余焉んぞ此敵を倒さざるを得んや。是れ此唯物學を人は實驗學ありと稱す、余は其稱の僞なるを知る、何となれば若し果して實驗を以て實物を研究するに止まらば、此又一の物理學に異ならざるべし、蓋し如何なる物理學者と雖亦皆事物の理、組織、現象等を究むればなり、然るに彼等唯物學者は實驗學者なりと自稱しながら、又實驗に係らざる事物の外は實在せざる者なり

と唱道しながら、正しく其實験に係らざる事を論せんとする者なり、何となれば彼等は他の學者の如く實物の状態及び其法則等を講究するに止まらずして、進んで世界の
大元、人間の
大元をも裁判せんと自負するものなればなり、知らずや世界人間の
大元の如きは實驗學の範圍外に在ることを、斯る自稱自突の學者と我基督公教とは到底和合すべき謂はれなきものなり、彼等は唯だ有形物を是れ採用して、凡ての無形物を除去せんことを主義とせるが故に、無神論を唱道し、無靈魂を主張して、世界萬物にも原因なく、吾人人類にも行末なしと斷定するに至るは、理の當然なり、而して我基督公教は原因なければ結果なく (non est effectus sine causa)、造物主なければ世界萬物なしと云ふを以て、固より彼等唯物論者の宗教と一致すべき道理なし、余は今茲に人々の皆知れる「世界萬物原因ありて造出せられたり」と云ふ事を喋々するの要を見ず、原因なければ此天地人間森羅萬象の現出せるの道理なしと云ふ事は、智者を待たずして知らるゝ所なり、故に余は單に此點に於ける我基督公教の教義を述べて、讀者の公明なる裁判に委するは最も捷徑なる道と思ふなり。

我基督公教の教義に曰く「大初に神天地を造り、次に其兩間に散在する萬物—即ち元素、礦物、植物、動物、及び人間を造りぬ」と、乃ち我基督公教は覆載間に在る物質と、生命と、智識等を以て、皆神の造出に係るものと定義するものなり、然れども此世界が如何様に變遷して、又幾數年の星霜を経て今日の如き現狀に成立したるやと云ふ事は、世の學者の講究と、其任意なる議論に附して、敢て之を定義せざるなり、唯物論者は此「神」と云ふ思想を除去し、唯物物の外原因をなしと云ふ主義を確立せんが爲に、萬事を睹して、百方盡力したれども、未だ人心を満足せしむる名説は案出せられず、今日まで案出せられたる者は唯だ二つ、曰く世界は始なく終なし、曰く原因なくして現出せりと云ふ事は是れなり、彼等今日までの進歩は、此世界が始なく斯く繼續すと、原因なくして初まれりと云ふ二事に過ぎざるあり。

請ふ余をして彼等畢生の名案を水泡に歸せしめよ、余は先づ斷ず、世界は始なく斯く繼續すと云ふを得ずと、何となれば吾人今世界を観るに、運動なる者あり、而して其運動は縱令萬古斯の如く繼續すと云ふと雖、動かば必ず動きたる初めある事は、常に

器械學の法則たるのみならず、普通の常識も亦斯く教ゆるなり(其二)。又世界の生物は代々生殖傳承して鎖の如く輪の如し、而して此鎖此輪如何程長く且つ大なりと雖、必ず一を以て初まりたる事は算數學の規定する所にはあらずや(其二)。余故に斷言す、世界は初なく斯く繼續すと云ふ論は決して成立せずと。

世界が原因なくして現出せりと云ふが如きは、今更之を辯せざるも人皆其背反なるを知るなり、何となれば「無」より「有」が自から出づべき道理なきとは、必ずしも識者を待て後知る所にあらざればなり、初めより何も無かりせば、イツ迄も何も無かるべし、彼等唯物論者の主義を裸體にするときは、斯の如く道理に背反す。

是に於て乎彼等は此背理なる主義に「誠らしき」衣服を着せしめて、正直なる讀者の目を欺かんが爲め、古來より種々に工夫を凝したり、古の唯物論者は嘗て奇怪なる衣服を製して曰く「千萬無量、異狀異態の原子上より落下し、落下の際互に相衝突し、附合し、變化し、遂に萬物を組成するに至れり」と、何處より落下し、如何なる知慮作用によりて斯く組成したるやは、無論彼等之を説明せず、余は之を駁するの價あるを見

す、言々皆無理、是れ此説の適評ならん、今の唯物論者は質同じきも少しく風變りの衣服を製作して曰く「萬物の大本は唯一の原子なり、然れども此原子内に一種異様の力を具備せるが故に、生長し、變動し、進化し、遂に千變萬化の後、今見る天地、人間、萬物になるを得たり云々」と、彼の原子は智慧分別ありて斯くなりたりとは、無論彼等之を云はず、唯だ一つの欲望ありたりと云ふ、(ハーゲルの説には、無何有の郷に此欲望ありたりと云ふ)、其在りたい、成りたいと云へる勢にて遂に存立、成就する點に達したりとぞ、是れ此大初の欲望、始終完全し行かん事を熱望し、絶へず變化し、進歩して、今見る世界萬物となりたりと、余は是等の説を駁するの時間を有せず、若し之を論評する忍耐ある者あらば、頗る無事に苦む人ならんと思考す。

古今の唯物論者が、如何程長さ迂廻の道を以て吾人を欺き、又如何程重ねたる衣服を以て其主義を裏むとも、正しき道理の下に一々其衣服を剥ぎ取りて、之を裸體にするときは、余の論辯を待たずして、直に其醜體を見はすものなり、彼等如何程假定説を堆積して千層萬重の雲霧を漠々たらしむるも、徐るに其雲を拂ひ霧を除けば、「無智

無覺の原子が自己の盲力によりて、今日の如き珍らしき有機物靈知物を組成するに至れり」と云ふに歸す、嗚呼天下の人を愚にするも亦甚しからずや、而して彼等は尙ほも吾人を愚になさんと欲す、則ち吾人が彼等に向て彼の珍らしき原子は何處より降り来るや、何處より湧き出でたるやと云へば、ルナンなる者は答て云ふ「萬々に絶へず凝結し來りたる結果なり」(No résultat d'une agglutination continuée pendant des milliards de siècles)、嗚呼何ぞ迷妄の一に此の如くなるや、何物もなきに如何にして時代あるを得たるや、良しや之あるを得たりとするも、何物と凝結して今日の如くなるを得たるや、言ふを止めよ、余は斯る奇々怪々なる説を品評するに、適當する言辭を有せざるなり、此の如き奇怪なる説は、啻に宗教のみならず、天地剖判以來の道理にも明かに背反するものなり、然るに此説進歩せる近代の學問の新主義として到る處に唱道せられ、如何なる教義よりも、如何なる格言よりも、千百層倍正確なる萬古不拔の名案の如く定義せられ、人若し伏して採用せざる時には、今の進歩世界に適當せざる頑冥固陋の人間の如く見做さるゝとは、實以て奇々怪々の至りと謂はざるべから

す。

嗚呼若し斯の如き説が世に勢力を有するに至らば、衰滅するもの豈唯た宗教のみならんや、人間の道徳も亦然り、何となれば此の如き新主義は、一の確實なる證據なきは言ふを待たず、人若し之を採用せんとする時には、勢ひ普通の道理にも背戻せざるを得ざればなり、原因なければ結果なく、無きものならば自から有るべきの道理なしと云ふ事は、是れ普通の道理にあらずや、然るに彼の奇々怪々なる新主義は、根本より之を排却して、自からを定義的に採用せしめんとし、而して偶々之に反抗する者あれば、目するに退歩的の人間なりとす、嗚呼何ぞ誣妄の太甚しきや、故に云ふ、此の如き説は宗教のみならず、教理のみならず、道理にも、常識にも明かに撞突するものなりと。

然らば則ち此新説世に行はるゝに随つて、我基督公教者の減少するは、毫も怪むに足らざるなり、何となれば彼れの主義は、直接に我基督公教の二大原理なる神の存在と人靈の不朽とを除去せんと欲するに在ればなり、然れども實際は如何、果して唯物論

者の新説が永く世に勢力を得べきものなるか、我基督公教は爲に其真理を失ふに至ると云ふべきか、今迄眞善なる宗教と認められたる我基督公教は今後眞と云はれ善と稱せられざるに至るべきか、又唯物論者の新主義は果して學問の進歩なりと誇稱するに足るべきか、余をして其真相を言はしめよ、唯物論者の説は流行病の如し、一時病人の心氣を狂亂せしめて、激烈なる暴怒を起すに足る、然れども熱冷めて病故に復したる後に至り、病間に爲したる事、語りたる事を追想するときは、悲愧交集りて自分ながら赧顔に堪へざる事あり、唯物論は正しく精神上の流行病なり、其結果は知識を旨し、是否を混じ、全く人を狂亂暴怒の醜體に至らしむ、若し病人を狂亂せしむる流行病にして誇るべくんば、唯物論者も其主義の一時天下の人心を狂亂せしむるを得々誇稱するを得べし、然れども余は云ふ、彼等が得々として誇揚する時は乃ち是れ天下の人々の爲に最も悲むべき秋なりと、何となれば此の如き精神上の流行病が實際其勢力を逞ふするに至らば、如何なる禍害を來すや測られざればなり、然りと雖幸にして流行病は永く繼續する者にあらず、世の中を荒す他の禍害の如く、一時に限るものなり、其

時節過ぎ去りて、人々正氣に復したる曉には、即ち明々地に之を云はば、吾人の後昆が暴風後の晴朗なる天地に出で、今日唯物論者の唱道したる説を調べ、又此説の天下國家の上に来したる道德上の結果を見るあらば、悚然股栗し、如何にして人間の智識は斯く迄狂亂するものなるかと驚き耻づるなるべし、其時今日の唯物論、無神論は厄病の如く掃蕩せられて、真理なる我基督公教は永遠なる神と共に、一時の暗黒世界より萬古不變の明光を放ちて、一層麗はしく、一層美しく輝くに至るべし、暴風一過したる後には、天日殊に麗はしきものなり、唯物無神の暴論の雲晴れたる時には、我基督公教の真理も赫々として一段の光輝を放つものなり。

愛國の眞理 終

明治廿九年六月十七日印刷
 明治廿九年六月廿一日發行

口述者 リギヨール

筆記者 前田長太

東京市京橋區新榮町六丁目三十五番地

發行者 石川音次郎

東京市京橋區木挽町一丁目十四番地

發兌元 文海堂

東京市京橋區銀座三丁目十五番地

印刷者 野村宗十郎

東京市京橋區築地一丁目二十番地

印刷所 株式會社東京築地活版製造所

東京市京橋區築地二丁目十七番地

新版廣告

古事新論

佛人リギョール氏著

正價八錢
郵税二錢

五月十五日發賣

國民之友批評 本書は一個の宗教論として價するのみならず、其中には多くの哲理を含蓄し豊富なる文學的趣味を貯蔵するが故に、讀者をして、殆んど倦む所なくして、巻を終へしむるの妙あり。その哲理に至りては、悉く吾人の首肯する所にあらざるも、其立論の大にして警語に富み、諷刺に長ずるは、我邦に發行せる宗教家の著作として未だ曾て此編を見ざるなり。此書中引用せる所のものは、羅旬、佛蘭西の哲學者及詩人の警句にして、皆多少の眞理を語るものなり。

佛人リギョール氏著

事跡以前以後之歴史

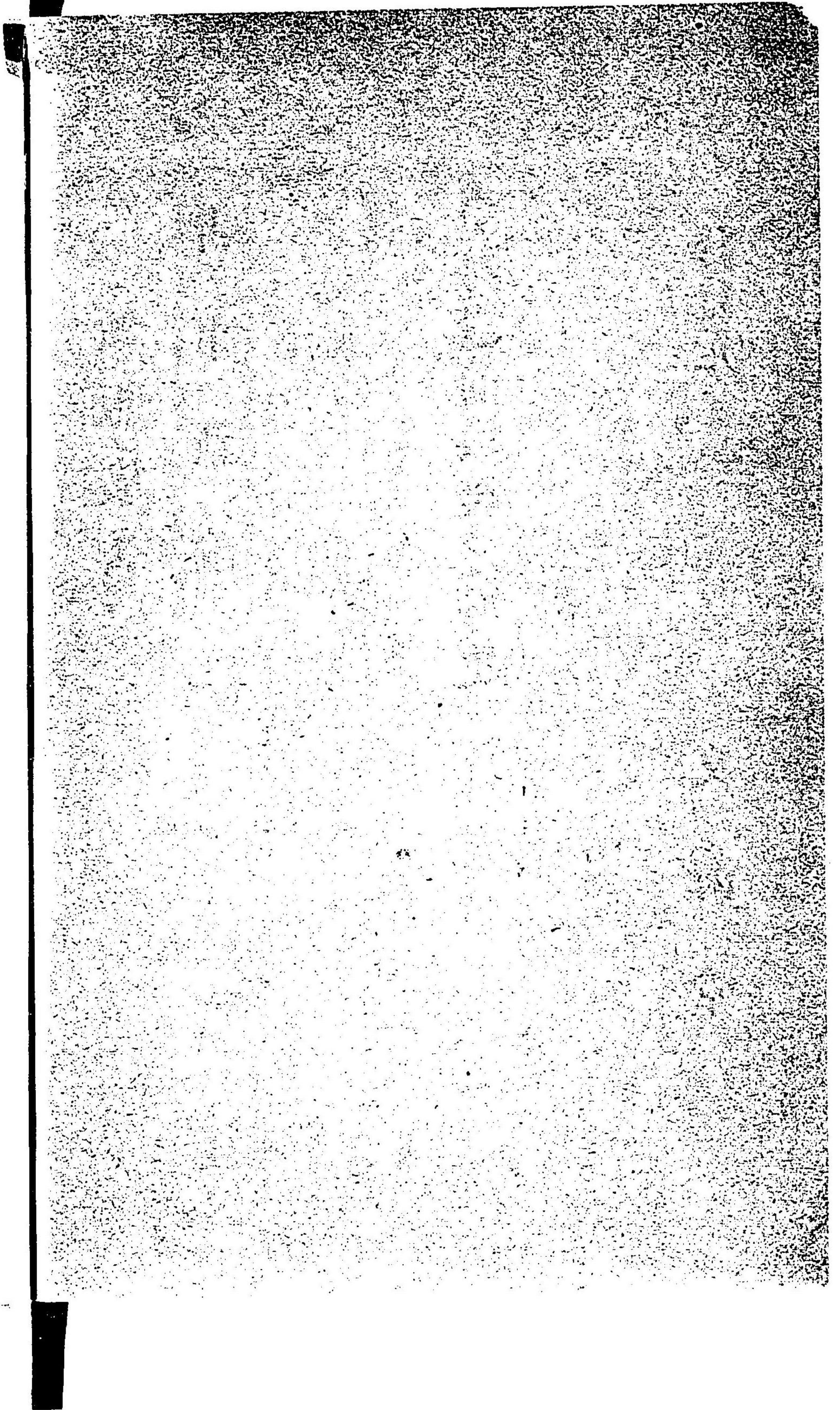
近日出版

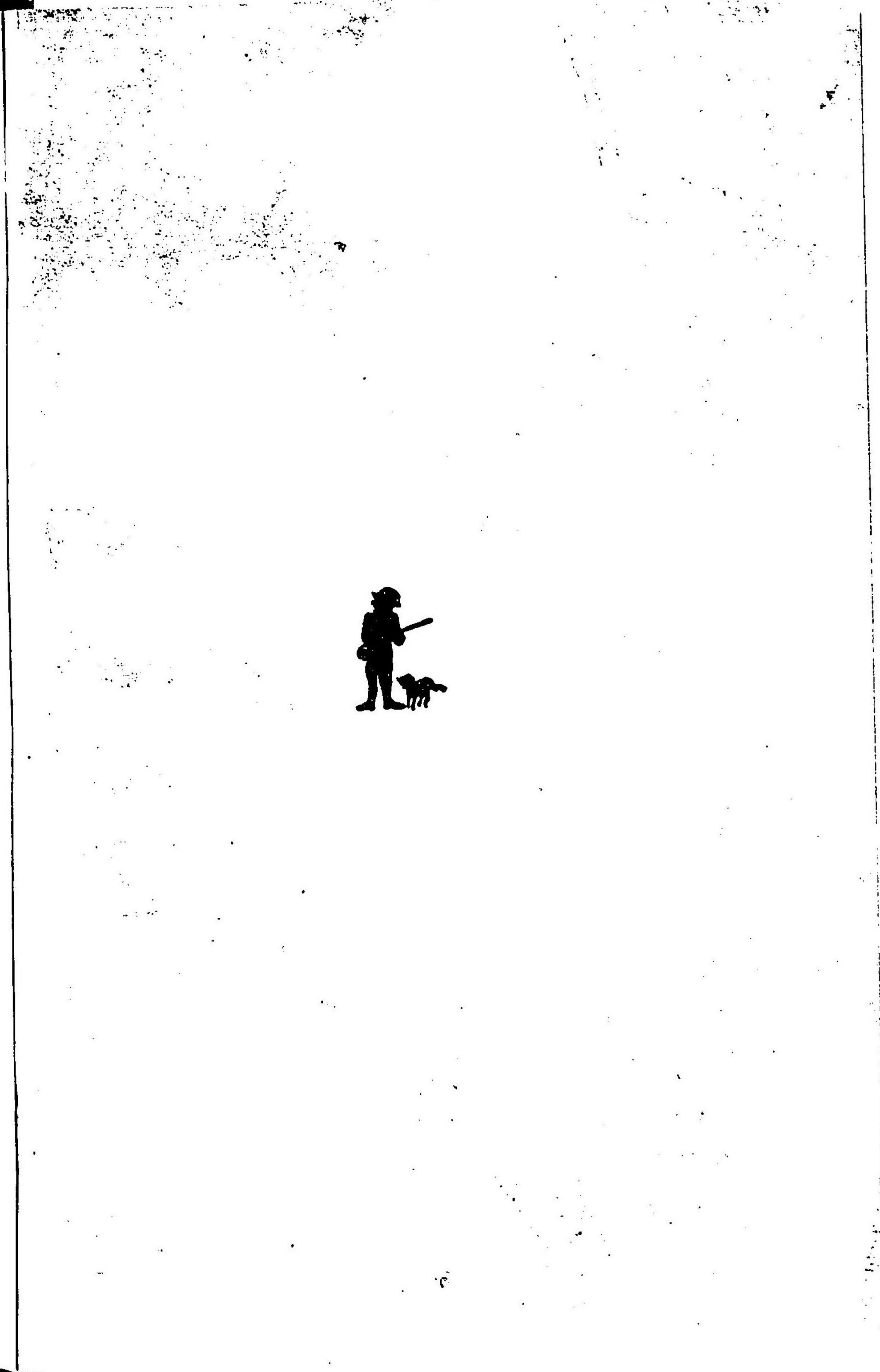
本書は第四卷に分ち、第一卷は事跡以前以後之歴史緒論、第二卷は事跡以前之歴史、預言、第三卷は事跡以後之歴史、福音、第四卷は事跡以前以後之歴史結論にして、其題既に奇抜、其論又極めて斬新、而して書中の主人公は世界を二分して之を前後より支持したる神的人物なりと云へば、亦以て本書の如何なる價值を有し、如何なる快味を帯ぶるかを知るべきなり。

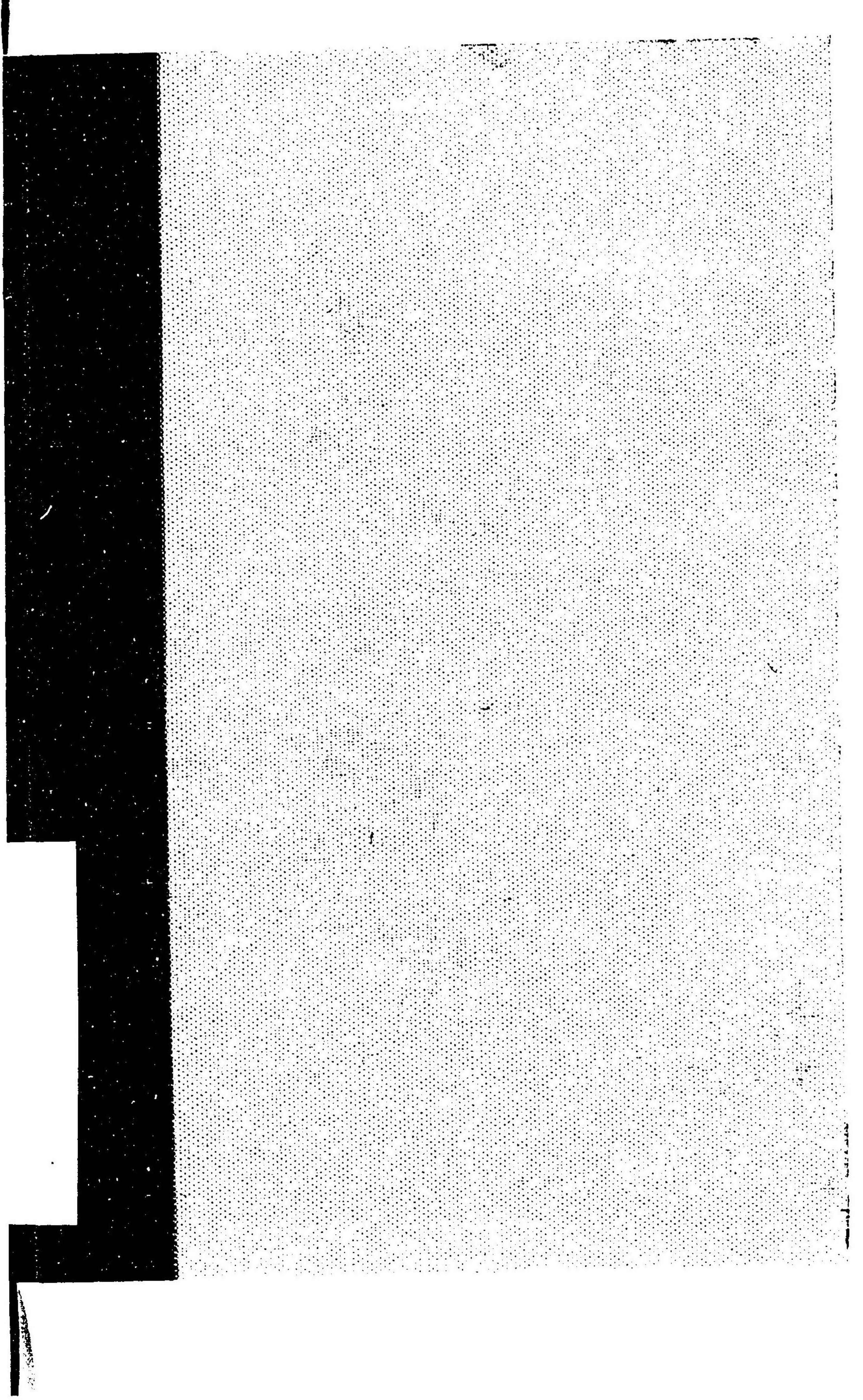
發兌元

東京市京橋區銀座
三丁目十五番地

文海堂







特21

193

愛国の真理 全

特ヨル口述
前田長太筆記

国立国会図書館

020203-000-3

特21-193

愛国の真理 一名、關安正議

前田 長太/記

M29

ABI-0002

